茨城県笠間市

御前塚古墳群
北浦東遺跡

－市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2008年３月

笠間市教育委員会
株式会社 地域文化財コンサルタント

茨城県笠間市

御前塚古墳群
北浦東遺跡

－市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2008年３月

笠間市教育委員会
株式会社 地域文化財コンサルタント

愛宕山山頂より御前塚古墳と藤塚古墳を望む

御前塚古墳（１号墳）現況

藤塚古墳（２号墳）周溝内小型箱式石棺出土，勾玉・臼玉・土師器坏

藤塚古墳（２号墳）周溝内小型箱式石棺出土，勾玉・臼玉

序

笠間市は，茨城県のほぼ中央に位置し，北西部には，八溝山系が，南西部には愛宕山・難台山・館岸山が連なり，中央を北西部から東部にかけて涸沼川が台地を潤す自然豊かな地域です。また，河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから，原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

特に今回の道路改良事業の計画地となった岩間公民館・図書館周辺には，御前塚古墳・藤塚古墳を始め数多くの古墳が所在し，これらの古墳の分布は，この地域にいくつかの勢力が存在していた事実をうかがわせてくれます。

本書は，御前塚古墳群・北浦東遺跡の発掘調査の成果を収録したものです。道路改良工事に伴う調査でありますので，限られた部分の発掘調査でありますが，本書を通して郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後になりましたが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成20年３月

御前塚古墳群発掘調査会長
笠間市教育委員会教育長
飯島　勇

例　言

1．本書は，市道改良工事に伴う，「御前塚古墳群・北浦東遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本調査は，笠間市教育委員会により行われた確認調査の結果をもとに，笠間市役所　岩間支所道路整備課が開発する「市道改良工事」の建設用地のうち，約540㎡を対象に埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

3．現地発掘調査から報告書刊行に至る業務は，御前塚古墳群発掘調査会より依頼を請けた株式会社　地域文化財コンサルタントが笠間市教育委員会と同調査会の指導と協力に基づき実施した。

4．遺跡の所在地，調査面積，調査期間（整理調査含む）は下記のとおり。

所 在 地・茨城県笠間市泉字北浦1956-1他

調査面積・540㎡（内訳 調査区1．367㎡，調査区2．71㎡，調査区3．102㎡）

調査期間・平成19年12月17日～同年12月26日 整理期間・平成20年1月7日～同年3月31日

5．調査組織は下記のとおり。

－御前塚古墳群発掘調査会－

会　長	笠間市教育委員会教育長	飯島　勇
副会長	笠間市文化財保護審議会副会長	島田　榮
	笠間市教育委員会 生涯学習課 課長	小坂　清
理　事	松嶋　繁・光野志乃ぶ・成田英光・川崎史子	
－指導員－	茨城県埋蔵文化財保護指導員	川崎純徳
	笠間市文化財保護審議委員	能島清光
－事務局－	笠間市教育委員会 生涯学習課	

6．現地調査担当者は下記のとおり。

－確認調査－	笠間市文化財保護審議委員	能島清光
	茨城県埋蔵文化財保護指導員	川崎純徳
	笠間市教育委員会 生涯学習課　海老原和彦・海老澤　仁・川松祐市	
－本調査－	主任調査員・（株）地域文化財コンサルタント 調査研究部課長	齋藤　洋
	調 査 員・（株）地域文化財コンサルタント 調査研究部	小川将之
	調 査 員・（株）地域文化財コンサルタント 調査研究部	野村浩史

7．写真撮影担当者は下記のとおり。

－現場調査－　小川将之・野村浩史　　－整理調査－　野村浩史

8．本書の執筆と編集は，齋藤　洋が総括した。執筆分担と文責は下記のとおり。

第1章・第1節　笠間市教育委員会・第1章．第2節第2・3項　小川将之．第3節　野村浩史，第2章・第3章・第4章　齋藤　洋

9．出土遺物及び写真・原図等の資料全般は笠間市教育委員会が保管している。

10．発掘調査及び報告書作成に際し下記の諸機関・諸氏よりご指導，ご協力を賜った。

御芳名を記して感謝申し上げる。（順不同，敬称略）

茨城県教育庁文化課　笠間市教育委員会　笠間市立岩間公民館　㈱海老重建設　㈱中建設印旛支店
川崎純徳　能島清光　後藤一成　鈴木利通　川口武彦　星野保則　松川由次　間宮正光　折原洋一
上生朗治　芦田和設　戸村真之　浅野泰三　笠井宏悦　大賀　健　宮内友行　月沖則史　近江屋成陽
松田　晶　小川浩樹　青木紀彦　武田俊哉　会沢秀人　浅野博三

11．現地調査及び整理調査にて御尽力を賜った諸氏は下記のとおり。心より御礼申し上げる。（順不同）

深山恒男	椋　勝雄	川村理華	山本清二	中尚秀雄	中島とみこ
海老原龍男	中村　薫	北原　隆	鈴木正弘	岡本修一	藤井陽子
田口るみ子	田沼康子				

目　次

本文目次

序
例言・目次
第1章　調査に至る経緯と調査方法 ・・・ 1
　第1節　調査に至る経緯 ・・・ 1
　第2節　調査方法 ・・・ 2
　　第1項　試掘調査 ・・・ 2
　　第2項　本調査 ・・・ 2
　　第3項　整理調査 ・・・ 3
　第3節　現場調査と整理調査の経過（調査日誌抜粋） ・・・ 4
　　第1項　現場調査 ・・・ 4
　　第2項　整理調査 ・・・ 5
第2章　遺跡の位置と環境 ・・・ 6
　第1節　位置的環境 ・・・ 6
　第2節　歴史的環境 ・・・ 6
　第3節　周辺の遺跡 ・・・ 8
第3章　検出された遺構と遺物 ・・・ 10
　第1節　遺構と遺物の概要 ・・・ 10
　　第1項　住居跡 ・・・ 10
　　第2項　古墳の周溝 ・・・ 12
　　第3項　古墳時代の土坑 ・・・ 20
　　第4項　中世の土坑 ・・・ 23
　　第5項　時期不明の土坑 ・・・ 24
第4章　総括 ・・・ 25
　第1節　遺跡の概観 ・・・ 25
　第2節　弥生時代 ・・・ 25
　第3節　古墳時代（古墳群） ・・・ 27
　　第1項　御前塚古墳（1号墳） ・・・ 31
　　第2項　藤塚古墳（2号墳） ・・・ 38
　　第3項　7号墳・8号墳 ・・・ 54
　　第4項　中世の土坑（2号土坑） ・・・ 56
参考・引用文献一覧
凡例・附序
抄録・資料の取扱いについて

挿図目次

第1図　調査区の位置 ・・・ 1
第2図　トレンチ設定図 ・・・ 2
第3図　調査区設定図 ・・・ 3
第4図　遺跡位置図 ・・・ 7
第5図　周辺の遺跡分布図 ・・・ 8
第6図　御前塚古墳群・北浦東遺跡遺構全体図 ・・・ 9
第7図　1号住居跡実測図 ・・・ 11
第8図　2号住居跡実測図 ・・・ 12
第9図　御前塚古墳（1号墳）周溝実測図 (1) ・・・ 13
第10図　御前塚古墳（1号墳）周溝実測図 (2) ・・・ 14
第11図　御前塚古墳（1号墳）周溝実測図 (3) ・・・ 15
第12図　藤塚古墳（2号墳）周溝実測図 ・・・ 17
第13図　7号墳周溝実測図 ・・・ 18
第14図　8号墳周溝実測図 ・・・ 19
第15図　石棺実測図 ・・・ 21
第16図　2号土坑実測図 ・・・ 23
第17図　1号土坑実測図 ・・・ 24
第18図　旧岩間町内における弥生時代の遺跡分布状況図 ・・・ 25
第19図　2号住居跡・1号土坑弥生土器実測図 ・・・ 26
第20図　参考資料 ・・・ 26
第21図　御前塚古墳群の分布状況 ・・・ 30
第22図　平成19年度実施の御前塚古墳実測図 ・・・ 31
第23図　計測軸設定状況図 ・・・ 31
第24図　1号トレンチ設定状況図 ・・・ 32
第25図　1号トレンチ実測図 ・・・ 34
第26図　墳丘を廻る周溝の推定線－1 ・・・ 35
第27図　御前塚古墳断面図 ・・・ 35
第28図　御前塚古墳周溝覆土出土遺物 ・・・ 36
第29図　抜粋資料 ・・・ 37
第30図　墳丘を廻る周溝の推定線　2 ・・・ 38
第31図　石材番号参照図 ・・・ 44
第32図　小型箱式石棺の微細実測図－1 ・・・ 45
第33図　小型箱式石棺の微細実測図－2 ・・・ 46
第34～39図　滑石製模造品（臼玉）(1)～(6) ・・・ 47～52
第40図　滑石製模造品（臼玉・勾玉）(7)・土師器坏 ・・・ 53
第41図　7・8号墳現況平面図及び周溝推定線 ・・・ 55
第42図　2号土坑出土遺物（かわらけ） ・・・ 56

表目次

表－1　御前塚古墳群・北浦東遺跡周辺遺跡一覧表 ・・・ 8
表　2　2号住居跡・1号土坑出土弥生土器観察表 ・・・ 26
表－3　軸計測値 ・・・ 31
表　4　御前塚古墳周溝覆土出土埴輪・石器観察表 ・・・ 36
表－5　石材集計表 ・・・ 44
表　6～11　滑石製模造品（臼玉）(1)～(6) ・・・ 47～52
表－12　滑石製模造品（臼玉・勾玉）(7)・土師器坏 ・・・ 53
表－13　石棺内出土土師器観察表 ・・・ 53
表－14　2号土坑出土かわらけ観察表 ・・・ 56

挿入写真図版目次

写真1　1号住居跡全景 ・・・ 10
写真2　2号住居跡全景 ・・・ 11
写真3　御前塚古墳（1号墳）周溝全景 (1) ・・・ 12
写真4　御前塚古墳（1号墳）周溝全景 (2) ・・・ 13
写真5　御前塚古墳（1号墳）周溝土層断面 (1) ・・・ 13
写真6　御前塚古墳（1号墳）周溝土層断面 (2) ・・・ 13
写真7　藤塚古墳（1号墳）周溝作業風景 ・・・ 13
写真8　藤塚古墳（2号墳）周溝全景 (1) ・・・ 16
写真9　藤塚古墳（2号墳）周溝全景 (2) ・・・ 16
写真10　7号墳周溝全景 ・・・ 18
写真11　8号墳周溝全景 (1) ・・・ 19
写真12　8号墳周溝全景 (2) ・・・ 19
写真13　8号墳周溝土層断面 ・・・ 19
写真14　掘り方完掘状況 ・・・ 20
写真15　石棺 ・・・ 20
写真16　蓋石検出状況 ・・・ 20
写真17　掘り方土層断面 ・・・ 21
写真18　石棺内遺物出土状況 ・・・ 21
写真19　石棺内遺物出土状況近景 ・・・ 22
写真20　石棺内遺物出土状況（勾玉） ・・・ 22
写真21　2号土坑全景 ・・・ 23
写真22　2号土坑遺物出土状況 ・・・ 23
写真23　1号土坑全景 ・・・ 24
写真24　2号住居跡・1号土坑出土遺物 ・・・ 26
写真25　1号トレンチ完掘，周溝幅員確認状況 ・・・ 32
写真26　1号トレンチ調査状況　1 ・・・ 33
写真27　1号トレンチ調査状況－2 ・・・ 33
写真28　1号トレンチ調査状況－3 ・・・ 33
写真29　1号トレンチ調査状況－4 ・・・ 33
写真30　1号トレンチ調査状況－5 ・・・ 33
写真31　1号トレンチ調査状況　6 ・・・ 34
写真32　1号トレンチ調査状況－7 ・・・ 34
写真33　1号トレンチ調査状況－8 ・・・ 34
写真34　1号トレンチ調査状況－9 ・・・ 34
写真35　削平状況－1 ・・・ 35
写真36　削平状況　2 ・・・ 35
写真37　御前塚古墳周溝出土遺物 ・・・ 36
写真38　参道から記念碑を望む ・・・ 39
写真39　記念碑近景 ・・・ 39
写真40　掘り方プラン検出状況 ・・・ 39
写真41　調査状況　1 ・・・ 40
写真42　調査状況－2 ・・・ 40
写真43　調査状況　3 ・・・ 40
写真44　調査状況－4 ・・・ 40
写真45　調査状況－5 ・・・ 40
写真46　調査状況－6 ・・・ 41
写真47　調査状況－7 ・・・ 41
写真48　調査状況　8 ・・・ 41
写真49　調査状況－9 ・・・ 41
写真50　調査状況－10 ・・・ 41
写真51　調査状況－11 ・・・ 41
写真52　調査状況－12 ・・・ 41
写真53　箱式石棺を構成する石材－1 ・・・ 43
写真54　箱式石棺を構成する石材－2 ・・・ 44
写真55　調査状況　13 ・・・ 45
写真56　調査状況－14 ・・・ 45
写真57～62　滑石製模造品（臼玉）(1)～(6) ・・・ 47～52
写真63　滑石製模造品（臼玉・勾玉）(7)・土師器坏 ・・・ 53
写真64　7号墳全景 ・・・ 54
写真65　8号墳全景 ・・・ 54
写真66　2号土坑出土遺物（かわらけ） ・・・ 56

第１章．調査に至る経緯と調査方法

第１節　調査に至る経緯

平成 18 年 10 月 23 日，笠間市役所岩間支所道路整備課は，笠間市教育委員会教育長に対して，笠間市泉字北浦地内において計画されている市道改良工事における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて笠間市教育委員会は，水戸教育事務所の茨城県埋蔵文化財指導員である川崎純徳氏に調査を依頼し，11 月 27 日に現地踏査を行い，12 月５日に試掘調査を実施した。

事業計画地は，当初遺跡№ 08・322・105 御前塚古墳群の範囲内であることから試掘調査を実施したが，御前塚２号墳（藤塚古墳）に隣接している２基の小古墳脇に設定したトレンチから，竪穴状の遺構の一部と弥生後期の土器片１片が出土した。

笠間市教育委員会は，12 月 20 日に川崎純徳氏に依頼し，遺跡分布調査を実施。御前塚古墳群に新たな古墳が３基発見されたこと，また，遺跡範囲の南側から土器片，小古墳周辺に弥生後期の土器片が若干認められたことから，平成 19 年１月 17 日，遺跡発見通知を茨城県教育委員会へ提出し，新たに「御前塚７号墳・８号墳・９号墳」と「北浦東遺跡」が認定された。

平成 19 年３月６日，笠間市教育委員会は，再度川崎純徳氏に試掘調査を依頼し実施したところ，御前塚１号墳（御前塚古墳）の周溝を確認したため，３月９日，岩間支所道路整備課あてに事業計画地内に御前塚古墳群並びに北浦東遺跡が所在する旨を回答した。

岩間支所道路整備課は，茨城県教育委員会教育長に対して，平成 19 年３月 12 日付けで御前塚古墳群並びに北浦東遺跡について文化財保護法 94 条第１項の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要と判断し，平成 19 年５月 14 日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて，笠間市教育委員会は生涯学習課に「御前塚古墳群発掘調査会」を設立し，平成 19 年 11 月 16 日付けで文化財保護法第 92 条第１項の規定による発掘調査届け出を茨城県教育委員会へ提出，川崎純徳氏と笠間市文化財保護審議委員である熊島清光氏を指導委員として 12 月 17 日より発掘調査を実施することとなった。

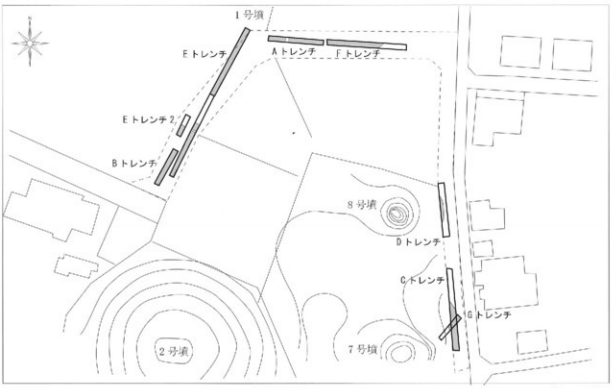
第１図　調査区の位置　　黒塗り部分が今回の調査区

第２節　調査方法

第１項　試掘調査

試掘調査は，市道改良工事の範囲に対して合計で８本のトレンチを設定し遺構の有無の確認を行った。

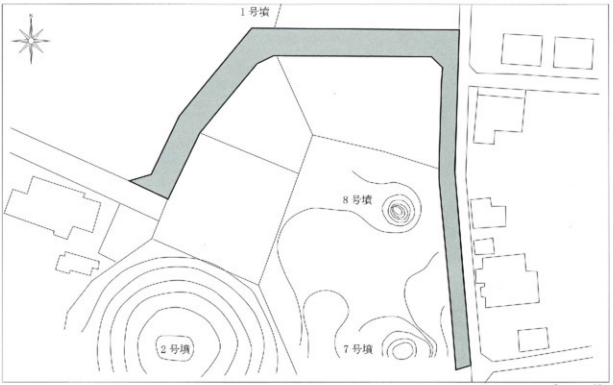
調査の方法は，表土の掘削，除去には小型重機を使用し，遺構確認面では人力による精査を試み遺構の検出に努めた。設定したトレンチの内訳は，茨城県教育委員会の指導に基づき，１号墳（御前塚）の周溝の存在を確認する為にＡトレンチ・Ｅトレンチ（北側）・Ｆトレンチを設定。２号墳（藤塚）の周溝を確認する為にＢトレンチ・Ｅトレンチ（南側）・Ｅトレンチ２を設定。７号墳の周溝を確認する為にＣトレンチ・Ｇトレンチを設定。８号墳の周溝を確認する為にＤトレンチを設定し調査に望んだ。結果，１号墳（御前塚），２号墳（藤塚），７号墳，８号墳ともに周溝の存在が明らかになるとともに，７号墳に設定したＣトレンチでは，竪穴状の遺構の一部も検出する事が出来た。今回の試掘調査によって得られた遺物は希薄で，７号墳に設定したＣトレンチより出土した，弥生時代後期のものと考えられる土器細片が１点のみであり，古墳に由来するであろう埴輪片などの遺物の出土は叶わなかった。下図はトレンチの設定状況を示した全体測量図である。



第２図　トレンチ設定図

第２項　本調査

本調査は，試掘調査の成果を踏まえ，市道改良工事の範囲である 540 ㎡が対象となる。発掘調査に先立ち，中型の重機を用いて遺構確認面までの表土除去を行い，その後，GPS 機器による測量を実施し，調査区内に公共座標を設置した。当該地の一部は近隣住民の生活道路に接している為，通行の支障にならないよう遺構の検出を行う範囲を分割し，その分割した範囲の一箇所の記録保存を行ったのち埋め戻し，次の調査に移行する体制をとった。また，調査の最後には，公共座標を使用した測量士による御前塚古墳の墳丘測量も実施した。



網掛け部分は調査区

第３図　調査区設定図

第３項　整理調査

整理調査は㈱地域文化財コンサルタント東葛整理室にて行った。

遺物は洗浄・注記・接合を行い，接合したが強度が弱い遺物に対しては必要な補強を施した。

遺構写真はアルバムに収め，必要事項を写真台帳に記載した。

遺構実測図はグラフィックソフトを使用して編集し，遺物実測図は製図ペンにてトレースを行った実測図をグラフィックソフトで編集した。

報告書の作成はDTPソフトウェアを用い各資料を集成したのち，刊行に至った。

第3節　現場調査と整理調査の経過（調査日誌抜粋）

第1項　現場調査

平成19年12月

14日　本日より御前塚古墳群・北浦東遺跡の調査を開始する。重機の搬入を行い，フェンス撤去など表土除去作業のための準備を開始する。

17日　調査区3から表土除去作業を開始する。同時に基準となるグリット杭の設定を行う。

18日　本日より調査区2の調査を開始する。遺構プラン検出のための精査を行い，調査区南側に遺構を確認し掘削作業を開始する。土層断面の記録，写真撮影，平面図の作成を行う。調査区2は道路に隣接しているため，安全上の配慮から調査終了と同時に埋め戻しを行い，調査が完了する。調査区3のプラン確認のための精査を行う。7号墳・8号墳の周溝，住居跡2軒，土坑1基を確認する。白線を引き，プラン全景の写真撮影を行う。7号墳の周溝から掘削を開始する。掘削の過程で土坑を1基確認する（2号土坑）。7号墳・8号墳の掘削が完了する。1号住居跡・2号住居跡の掘削を開始する。2号住居跡からは炉跡が確認される。

19日　1号住居跡・2号住居跡の掘削が完了する。調査区3の全景写真撮影を行い，平面図の記録作業を行う。調査区1のプラン確認のための精査を行う。

20日　調査区の範囲が限られているため，1号墳の周溝の範囲をより明確にする目的で，墳丘の南側にトレンチを入れる。トレンチ内の北側，中央，南側にサブトレンチを入れて，周溝の形状を調査する。それぞれの土層断面の記録，写真撮影，平面図の作成を行う。トレンチはグランドに隣接しているため，安全上の配慮から調査終了と同時に埋め戻し，調査が完了する。調査区1の1号墳・2号墳の周溝の掘削を開始する。

21日　1号墳・2号墳の周溝の掘削が完了する。2号墳の周溝の底部より新たな土坑のプランが確認される（3号土坑）。各周溝の清掃作業の後，土層断面，完掘全景の写真撮影を行う。各周溝の土層断面の記録作業を行った後，平面図の作成を行う。

22日　3号土坑の掘削を開始する。確認面から数センチで石材が出土する。石棺と思われる。

25日　引き続き3号土坑の調査を行う。石棺を残した状態で，土坑の土層断面の記録作業を行う。土坑の覆土を除去した後，石棺の平面図，見通し図の作成を行う。図面作成の後，石棺の上蓋の撤去を行う。石棺内部は覆土が混入しているため土層断面の確認作業を行う。掘削の過程で土師器の坏が2点重なり合って出土する。坏の周辺より多数の臼玉が出土したため，覆土の掘削作業を慎重に行う。取り除いた覆土はすべて袋に入れて回収する。

26日　引き続き3号土坑の調査を行う。石棺内部の覆土の土層断面の記録作業を行う。写真撮影の後，引き続き掘削作業を慎重に行う。覆土を除去した後，遺物出土状況の写真撮影と，遺物微細図の作成を行う。調査区の土層堆積状況を確認するためテストピットを調査区1に設定し，掘削を開始する。

27日　3号土坑内箱式石棺の遺物の点上げ作業を行う。坏の下部より勾玉が1点出土する。改めて写真撮影，記録作業を行う。点上げ作業が完了した後，石棺の完掘写真撮影，平面図の作成を行う。図面作成の後，石棺の解体作業を開始する。後日，石棺の復元を可能にするため，各石材の位置を克明に記録しながら解体作業を行う。調査区1に設定したテストピットの土層堆積状況の記録作業を行う。本年の調査は本日をもって終了する。

平成20年1月

4日　本日より現場調査を再開する。小型箱式石棺解体後の3号土坑の完掘写真撮影と平面図の作成を行う。調査区1の全景写真撮影を行い終了確認をうける。現場備品と機材の撤去を行う。本日をもって御前塚古墳群・北浦東遺跡の現場調査を終了する。

第2項　整理調査

平成20年1月

7日　本日より出土遺物の洗浄作業を開始する。

9日　洗浄作業が完了し、注記作業を開始する。

11日　注記作業を完了する。業務の都合により作業を一時中断する。

同年2月

4日　本日より整理作業を再開する。遺物の接合作業を開始する。

7日　遺構原稿の執筆、遺構図面の修正を進める。

11日　遺物の実測作業を開始する。

12日　発掘時に撮影したネガフィルム及びデジタルカメラデータの整理作業を開始する。

17日　実測作業が終了した遺物から観察表の作成を開始する。

20日　遺物のトレース作業を開始する。引き続き原稿の執筆作業も継続する。

28日　遺物写真の撮影を開始する。撮影は整理室に付設の専用スタジオにて実施する。

同年3月

7日　遺構のデジタルトレースを開始する。グラフィックソフトにて入稿用の版組レイアウトの作成を開始する。

15日　DTPソフトにて原稿、トレース図の編集作業を行う。

28日　編集作業が完了しデータを入稿する。本日をもって御前塚古墳群・北浦東遺跡の整理作業のすべての工程を完了する。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　位置的環境

現在の笠間市は，平成18年に実施された旧笠間市・旧友部町・旧岩間町との市町村合併によって再編された地方自治体であり，合併後の住民人口は約80,500人を数える。市域の総面積は，240.25 k㎡（旧笠間市131.61 k㎡，旧友部町58.71 k㎡，旧岩間町49.93 k㎡）で，区域は，東西約20 k m，南北約25 k mで構成され，北部は栃木県，西部は桜川市に，東部は水戸市，茨城町，南部は小美玉市と隣接する。今回発掘調査を実施した当該地は旧岩間町に属しており，茨城県のほぼ中央部に位置する。旧岩間町の地勢は，西側に阿武隈山系に連なる標高306mの愛宕山がシンボルとしてそびえ，そこから延びる雷台山・館岸山等の山地と，涸沼流域の樹枝状の沖積地，更にその間に展開する洪積台地によって成り立っており，山地より東側はほぼ平坦な沖積平野となる。愛宕山麓から流出する清流は北側で涸沼川へ，南側では巴川となって旧町域を限っている。愛宕山は山嶽信仰の霊山で，その開山は大同元年（806年）と極めて古く，古来より多くの人々の信仰を集めていた。現在では山頂部には愛宕神社が祭られており，火迦具土命を主祭神とした火防の神としてその名が知られている。そして，本社奥に祭られている境外社飯綱神社の悪態祭（悪退祭）は関東奇祭の一つにも数えられている。また，愛宕山周辺の山々も霊山として崇められており，延喜式々内社の羽柴山神社や，西寺，安国寺等，由緒ある社寺仏閣も建てられている。「御前塚古墳・北浦東遺跡」の所在する市内泉字北浦地区は，愛宕山東麓に位置し，桜川の支流北側に広がる標高約38m～40mの平坦な台地である。至近には JR常磐線の岩間駅が，近隣には常磐自動車道路の岩間 IC も所在する事から交通の便も良く，生活環境は充実している。付近の景観は大型の和風住宅と長閑な田園風景が融合した閑静な佇まいである。

第２節　歴史的環境

『茨城県遺跡地図（地名表編）』（平成13年３月　茨城県教育委員会発行）に掲載されている笠間市全体の周知の遺跡数は434箇所である。そのうち，旧岩間町内に所在する周知の遺跡数は171箇所を数える。旧岩間町内の遺跡分布状況を見ると，２つの河川に面した台地縁辺部に所在するものが多く，特に涸沼川流域に集中して分布する傾向が強い。これは近世の村落から継続して営まれていると思われる現在の集落の分布を見ても同じ状況を示しており，古代から現代に至るまで，水利の便に伴った分布が並ほど変わらない事が分かり興味深い結果となっている。『御前塚古墳・北浦東遺跡』の所在する北浦地区周辺では，泉十三塚遺跡・泉仲村遺跡・泉篭寓神社北遺跡（以上縄文早期）や，古宿遺跡（縄文中期），また，泉仲村遺跡・神木遺跡・泉巴川遺跡・石塚神根遺跡（以上弥生後期）等の古い時代の遺跡の所在も明らかとなっている。旧岩間町内には今回発掘調査を行った御前塚古墳群以外にも多数の古墳群が所在する。主な古墳群として，市野谷の北側に広がる微高地上に分布する二子塚古墳群（１～３号墳），涸沼川南岸に位置する下安居地区に分布する下安居古墳群（１～４号墳），下安居古墳群から涸沼川に沿って遡った，上安居地区の微高地上に分布する塚原古墳群（１～６号墳），涸沼川の南岸に位置する十師地区の台地上に分布する高畠古墳群（１～７号墳），随光寺川の北岸にあたる花園地区の台地上に分布する花園古墳群（１～21号墳），花園古墳群の北側に位置する堂山地区に分布する堂山古墳群（１～６号墳）の６箇所が確認されている。これらの古墳の中には，構築時期や性格が不明なものも多いが，出土遺物から５世紀代～７世紀代前半までに属すると考えられる古墳も確認されている。古墳時代になると，全国的に豪族による統治が始まると共に，村単位の集落が発展して行き，後に国や郡が成立してゆく。現在の茨城県もその例外では無く，大和朝廷の勢力は笠間地方にも及び，旧笠間市は常陸国新治郡，旧友部町は常陸国那珂郡及び茨城郡，旧岩間町は茨城郡に属していたと考えられている。

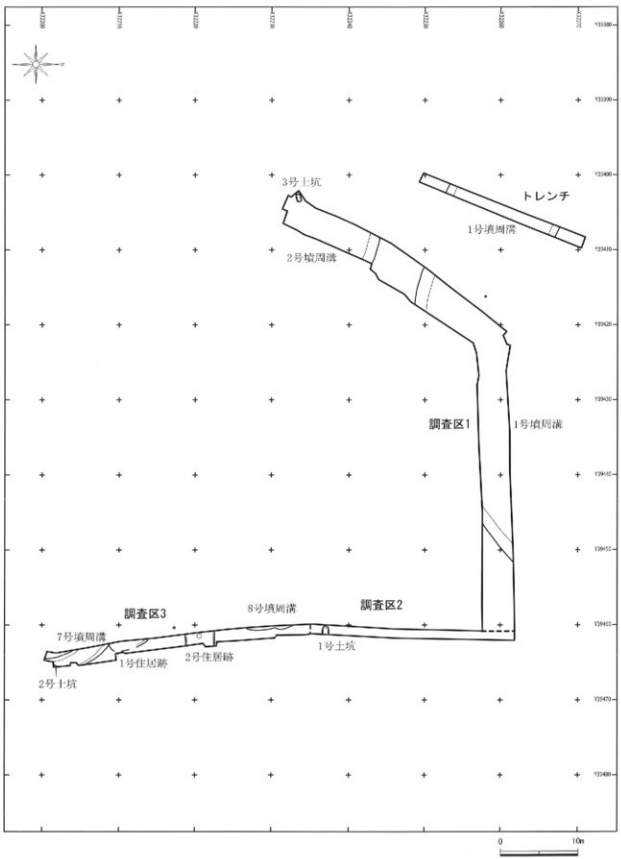
第４図　遺跡位置図

第３節　周辺の遺跡

表－１　御前塚古墳群・北浦東遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世
106	御前塚古墳群		○	○	○	○	○	051	二子塚遺跡			○	○	○	
171	北浦東遺跡			○		○	○	052	二子塚古墳群				○	○	
001	山本遺跡群				○	○	○	053	市野谷東遺跡		○		○	○	
002	山本遺跡群				○	○		054	小山谷遺跡		○		○	○	
003	石塚遺跡群				○	○		055	小山原遺跡				○	○	
004	鬼十二塚遺跡							056	向原遺跡		○				
010	六供北遺跡				○	○	○	058	和尚遺跡				○	○	
011	熊神北遺跡				○	○		059	鳥居前遺跡						○
012	八反神北遺跡				○	○	○	100	荒神古墳群				○		
013	神元遺跡			○	○	○	○	101	谷下遺跡				○	○	○
014	経塚神社北遺跡		○		○	○	○	102	馬坂遺跡				○	○	○
015	谷川遺跡				○	○	○	103	谷下堀遺跡				○	○	○
016	泉平遺跡			○	○	○		104	入前南遺跡				○	○	○
017	泉七号遺跡			○	○	○	○	106	下瀬ノ谷戸遺跡				○	○	○
018	杉山東A地							107	大谷沢遺跡		○		○	○	
019	大川原遺跡		○	○	○	○		108	駒塚遺跡		○		○	○	○
020	東筑遺跡				○	○		110	入谷沢A						○
021	遺跡地域内遺跡						○	111	駒塚B						○
022	山谷ノ台上遺跡				○	○	○	122	蓮光寺遺跡		○		○	○	○
023	御前西第1遺跡				○	○		123	堀ノ内遺跡		○		○	○	○
024	三輪神社境内遺跡		○	○	○	○		124	三塚遺跡		○		○	○	○
025	御前東原遺跡				○	○		151	秋葉山遺跡			○	○	○	
026	谷原北原遺跡			○	○	○		153	鹿島塚				○		○
027	石塚神社遺跡			○	○	○		154	御前下遺跡					○	○
028	東遺跡				○	○	○	155	新遺跡				○	○	○
029	古宿遺跡		○					156	下瀬谷遺跡				○	○	○
030	古市巴ノ遺跡			○	○	○	○	170	金沼神社遺跡		○		○	○	○

第５図　周辺の遺跡分布図



第６図　御前塚古墳群・北浦東遺跡遺構全体図

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構と遺物の概要

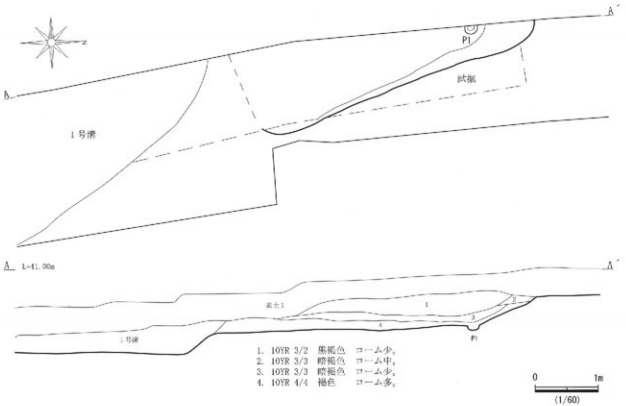
今回の発掘調査によって検出された遺構は，弥生時代後期のものと考えられる竪穴住居跡が２軒，各古墳の周溝の一部（御前塚古墳・藤塚古墳・７号墳・８号墳），並びに，藤塚古墳の周溝底部より検出の小型箱式石棺（墓）が１基，７号墳周溝内より検出された中世の所産であると考えられる土坑が１基，時期，用途が不明の土坑が１基である。調査範囲は全測図に示した通り，市道改良工事を実際に施行する縦の手状に延びる限られた狭い範囲である為，各遺構の全容を把握するには及ばない。しかし，公民館館長である鈴木利通氏の御協力を賜り，現在，グートボール場として機能しているグランド横にも，御前塚古墳の墳丘と直交した形でトレンチを設定し調査を実施する事が叶った。この結果，御前塚古墳の周溝の幅員と遺構確認面からの深度が明らかとなり，公共座標に乗せて記録保存する事が出来た。今回出土した主な遺物は，７号墳周溝横より検出した，弥生時代後期のものと考えられる住居跡から出土の土器片が12点と，藤塚古墳の周溝底部に構築された小型箱式石棺内より出土した，完形の土師器の坏が２点，滑石製の勾玉１点，及び臼玉269点である。また，７号墳周溝内より検出の２号土坑内からも墨書が施された完形の「かわらけ」が２個体出土している。その他では，御前塚古墳の周溝覆土中より，円筒埴輪の破片が113点と，石器が３点出土している。以下は遺構番号を追って記した調査成果の報告である。

第１項　住居跡

１号住居跡（写真１，第７図）

写真１　１号住居跡 全景　南東から

本住居跡は調査区の東側に走る市道側より検出された。遺構の殆どは調査区外西側へと延びる。確認し得た遺構の平面規模は，長軸が4.74m，短軸が1.34mで，遺構確認面から床面（底部）までの深さは概ね0.54mを測る。遺構の平面形状は方形を呈するものと推測され，確認し得た遺構覆土は黒褐色土を主体とする単層で締まりは無い。遺構内よりピットも１基検出しているが，本遺構に伴うものであるかは不明である。出土遺物は，ほぼ床面と考えられる位置より出土した弥生時代後期の所産であろう土器片が１点である。また，試掘調査時にも同時期の土器片が数点出土しているという。遺構も薄く，遺物資料も希薄の為，帰属年代の特定は困難であるが，出土遺物の形式学的特徴を踏まえた上で，弥生時代後期に属する住居跡である可能性を示唆したい。

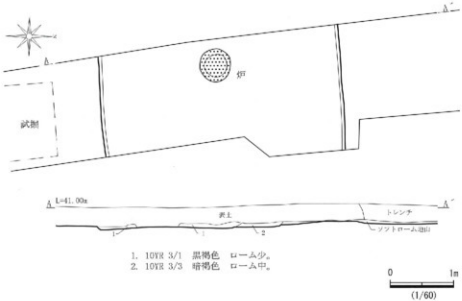


第７図　１号住居跡実測図

２号住居跡（写真２，第８図，表－２）

本住居跡も調査区の東側に走る市道側から検出されている。先述の１号住居跡より北側９ｍ先に位置する。確認し得た遺構の平面規模は長軸が3.84m，短軸が1.96mで，遺構確認面から床面までの深さは0.05mを測る。遺構の東側と西側は調査区外へと延びる為，全容は明らかとはなっていないが，遺構の平面形状は方形を呈するものと推測される。床面では顕著な赤色還元を受けた地床炉も１基検出している。柱穴と考えられるピット類の検出は無い。遺物は遺構覆土中より，弥生時代後期のものと思われる壺類の胴部破片が１点のみ出土している。１号住居跡同様に，検証資料が乏しく帰属年代の特定は難しい。しかし，出土遺物が本遺構に伴うものならば，形式学的特徴から弥生時代後期に属する可能性が考えられる。

写真２　２号住居跡 全景　南から



第８図　２号住居跡実測図

第２項　古墳の周溝

御前塚古墳（１号墳）周溝（写真３～７，第９～11図，表－４）

今回の本調査では，限られた調査範囲ではあったが，周溝外側の立ち上がりを３箇所で，周溝内側の立ち上がりを１箇所で確認する事が出来た。この事により，古墳本体を環状に囲む周溝の形状と，幅員等の規模の一端が明らかとなった。掘削場所により若干の違いはあるが，概ね現地表面より 0.90m ～ 1.24m の深さで周溝の確認面に到達する。この確認面から周溝底面までの深さは，現代の撹乱が深く入り込む箇所も多く一定ではない。今回の調査によって計測した数値の幅は 6.86 ～ 15.40m である。この周溝の底面はほぼ平坦で，ピットなどの痕跡は認められない。底面から周溝外側のラインに向けては緩やかに立ち上がってゆく様相を呈する。

写真３　御前塚古墳（１号墳）周溝 全景（1）　東から

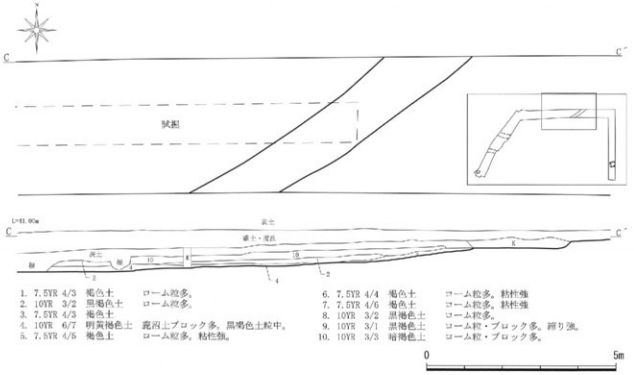
周溝の覆土は全体的に鹿沼土の大～少ブロックが大量に混入する暗褐色土が主体となる。以上の事由から水捌けが良く締まりは弱い。また，公民館館長の善意と御協力により掘削調査が可能となった，調査区東側のグラウンド内に設定した第１号トレンチ（以下１トレと省略）では，墳丘と直交する位置にて，周溝の外側の立ち上がりラインと，内側の立ち上がりラインを検出する事が出来た。さらにこの１トレ内の３箇所にサブトレンチを設定し，周溝の確認面から底面までの深さと立ち上がりの形状の把握に努めた。この結果，１トレにて確認し得た周溝の規模は，幅員が16m で，確認面から周溝の底面までの深さは最深部で０.６ｍを測る事が判明した。これらの調査成果については，第４章の総括の中で詳細を纏めているので参照して頂きたい。

写真４　御前塚古墳（１号墳）周溝 全景（2）西から

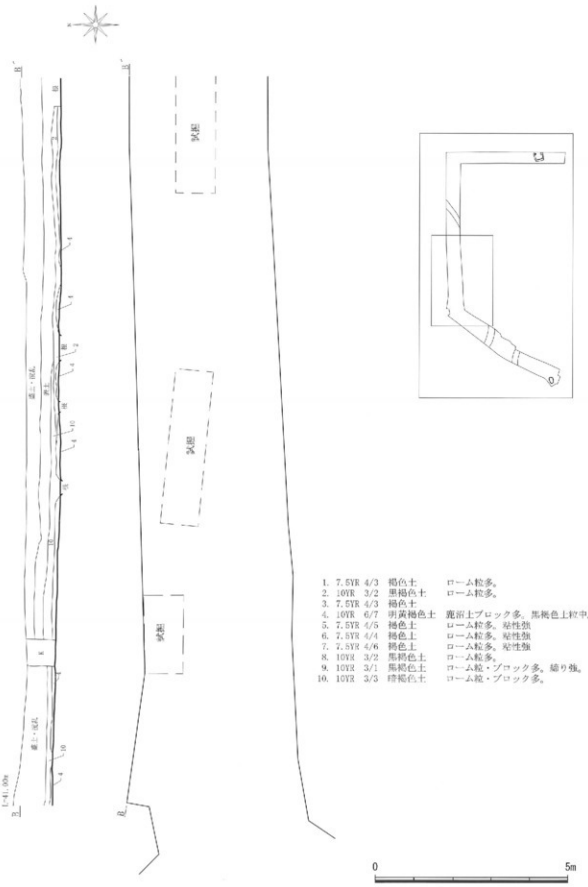
写真５　御前塚古墳（１号墳）周溝 土層断面（1）南から

写真６　御前塚古墳（１号墳）周溝 土層断面（2）東から

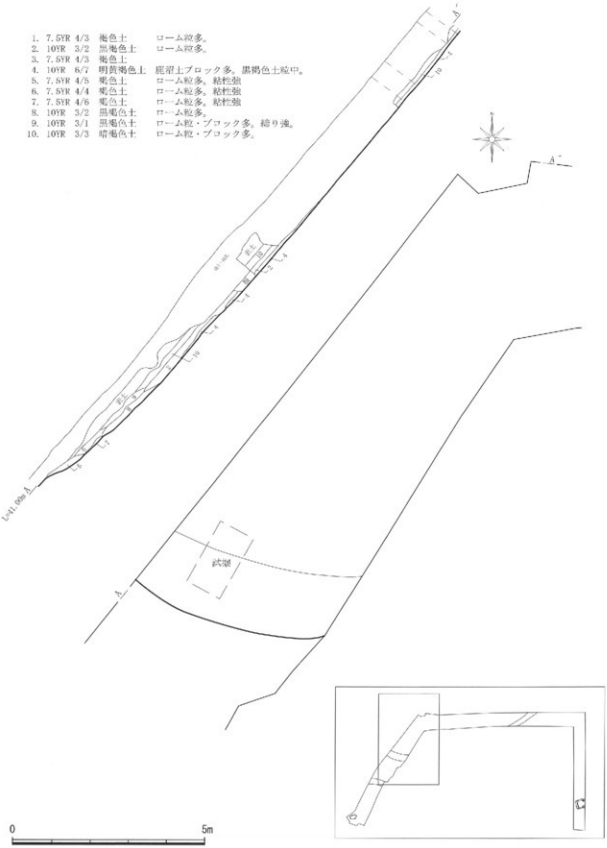
写真７　御前塚古墳（１号墳）周溝 作業風景



第９図　御前塚古墳（１号墳）周溝実測図（1）　　(1/100)



第 10 図　御前塚古墳（１号墳）周溝実測図 (2)



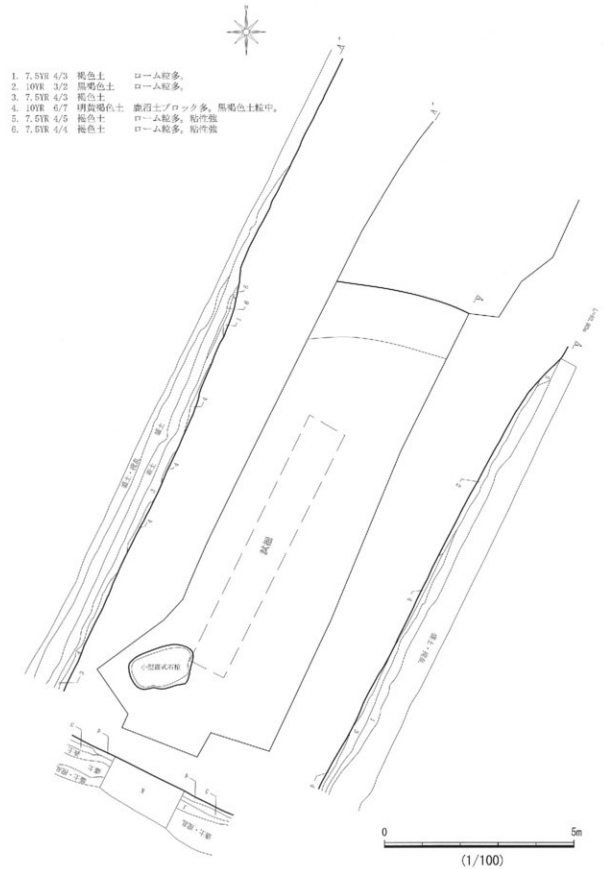
第 11 図　御前塚古墳（１号墳）周溝実測図 (3)

藤塚古墳（２号墳）周溝（写真８・９，第12図）

本周溝は，調査区南西側に所在する既存の市道との接続部付近にて検出された。現地表面から周溝の確認面までは約0.4mであり，その確認面より周溝の底面までの深さは最深部で約0.73mを測る。遺構の覆土は鹿沼土の大～小ブロックが多量に混入する褐色土が主体で締まりは無い。確認し得た周溝の底面は平坦で，同調査区の北東側にて検出した周溝外側のラインに向かい極緩やかに立ち上がる。覆土中及び底面からの遺物の出土は無い。この周溝の外側ラインの北東3.3m先には，御前塚古墳の周溝の外側ラインがあり，双方の古墳が近接して構築されていた事が明らかとなる。また，本周溝の底部からは，本節第３項と第４章総括の中で記述している小型箱式石棺の検出もある。

写真８　藤塚古墳（２号墳）周溝 全景（1）　北から

写真９　藤塚古墳（２号墳）周溝 全景（2）　北東から

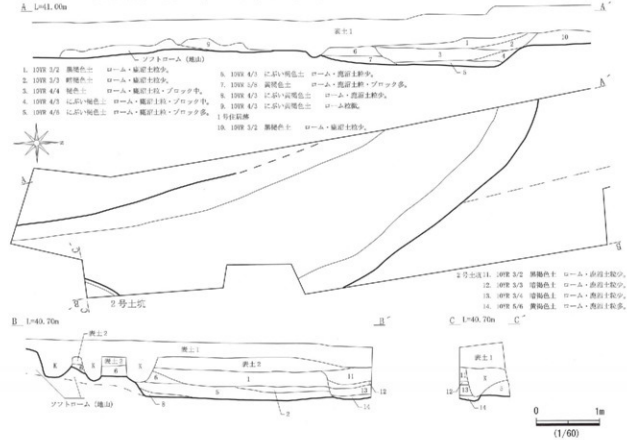


第 12 図　藤塚古墳（２号墳）周溝実測図

7号墳周溝（写真10，第13図）

写真10　7号墳周溝 全景　東から

本周溝は調査区の南側境界付近に位置し，先述の1号住居跡と第4項で記述する2号土坑と切り合いながら検出された。切り合い関係の新旧は，覆土の観察により1号住居跡が本遺構よりも古く，2号土坑が新しい事が判明している。現地表面から遺構確認面までは約0.6mで，その確認面より周溝底面までの深さは0.30mを測る。また，一部ではあるが周溝外側のラインと周溝内側のライン双方を検出する事が出来た。この調査成果により，本周溝の幅員は2.0mを測る事が明らかとなる。遺構の底面はほぼ平坦で，周溝の両端に向かい緩やかに立ち上がり，断面形状は浅い皿状を呈する。遺構覆土，底面からの遺物の出土は無い。



第13図　7号墳周溝実測図

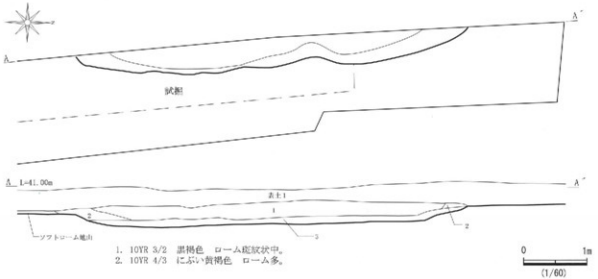
8号墳周溝（写真11～13，第14図）

写真11　8号墳周溝 全景（1）　北から

本周溝は，先述の2号住居跡の北方向9.4m先に位置する。今回検出されたのは周溝の外側の立ち上がりと底部の一部であり，遺構の殆どは調査区外の西側へ延びるものと思われる。遺構の覆土は褐色土を主体とする3層からなり，やや締まる。確認し得た範囲での周溝底面は平坦で，外側に向かい緩やかに立ち上がる。後世に若干の削平は受けていると思われるが，壁セクションでの断面形状は薄い皿状を呈す。覆土中，及び底面からの遺物の出土は無い。

写真12　8号墳周溝 全景（2）　南から

写真13　8号墳周溝 土層断面　東から



第14図　8号墳周溝実測図

第3項　古墳時代の土坑

小型箱式石棺の掘り方（旧3号土坑）（写真14～20，第15図，表－5～13）

本遺構は，調査区南西側の端部に位置し，藤塚古墳の周溝底面の精査時に検出された土坑である。遺構プランの検出段階では，確認面には砕石が散り，プラン内の覆土は鹿沼土，及びロームブロックが多量に混入する，一見すると現代の撹乱とも取れる荒れた様相を呈していた。しかし，写真撮影の為に精緻な清掃を行っていた際，土坑プラン内の覆土より小型箱式石棺の蓋石が出土した為，この土坑は石棺を埋納する為に掘削された「掘り方」であると判断し，急遽，慕跡に則した調査方法に切り替え調査を進めた。確認面での掘り方の平面形状は不整な楕円形を呈し，長軸が1.73m，短軸が1.05mを測り，長軸の延長は東西方向を指す。この小型箱式石棺の蓋石は，掘り方の確認面より5cm下方にて完全に姿を現す。検出時の状況は，撹形の大きな板状の石材が主となり石棺を塞ぎ，さらに隙間を埋める様に3枚の小さな石材が組み付けられていた。また，この石棺側壁と蓋石，及び全体を構成する小さな石材と石材の隙間にはしっかりと粘土も充填されている。これらの状況は，この箱式石棺が後世の人々の手にかかる事無く，現在まで密閉されたままの状態を保持していた事も無理なく想定出来よう。この石棺内部から出土した遺物は，完形の土師器坏が2点と，滑石製の勾玉が1点，臼玉が269点である。このうち，土師器坏の1点には赤彩が施される。

この小型箱式石棺の調査方法と構造，出土遺物については，第4章総括の中で詳細に纏めている。

写真14　掘り方 完掘状況　西から

写真15　石棺　西から

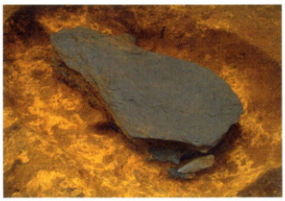
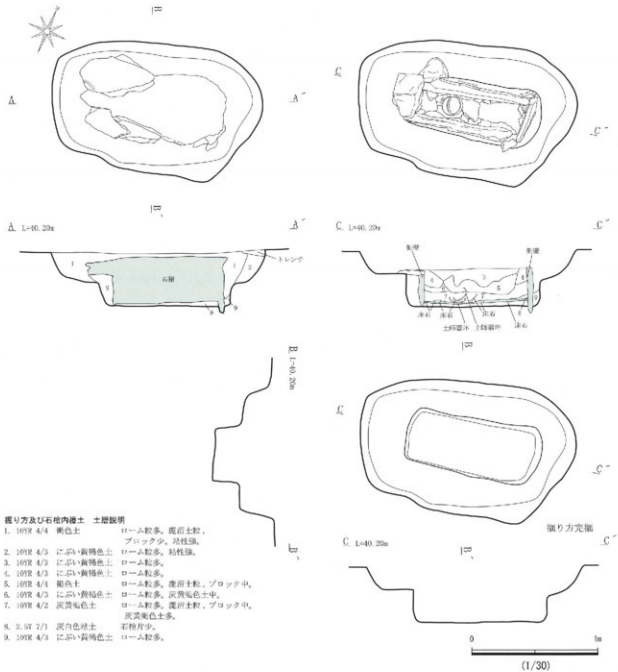


写真16　蓋石検出状況　東から



掘り方及び石棺内堆土　土層説明

1. 10YR 4/4　褐色土　　ローム粒多。炭化土粒、ブロック少。粘性強。
2. 10YR 4/3　にぶい黄褐色土　ローム粒多。粘性強。
3. 10YR 4/3　にぶい黄褐色土　ローム粒多。
4. 10YR 4/3　にぶい黄褐色土　ローム粒多。
5. 10YR 4/4　褐色土　　ローム粒多。炭化土粒、ブロック中。
6. 10YR 4/3　にぶい黄褐色土　ローム粒多。灰黄褐色土中。
7. 10YR 4/2　灰黄褐色土　　ローム粒多。炭化土粒、ブロック中。灰黄褐色土多。
8. 2.5Y 7/1　灰白色粘土　　石棺片中。
9. 10YR 4/3　にぶい黄褐色土　ローム粒多。

第 15 図　石棺実測図

写真 17　掘り方 土層断面　南から

写真 18　石棺内遺物出土状況　南西から

写真 19　石棺内 遺物出土状況近景　西から

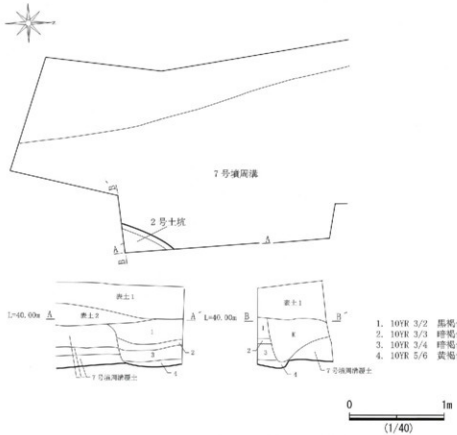
写真 20　石棺内 遺物出土状況（勾玉）

第4項　中世の土坑

2号土坑（写真21・22・66，第16図，表-14）

写真21　2号土坑 全景　西から

写真22　2号土坑 遺物出土状況　西から



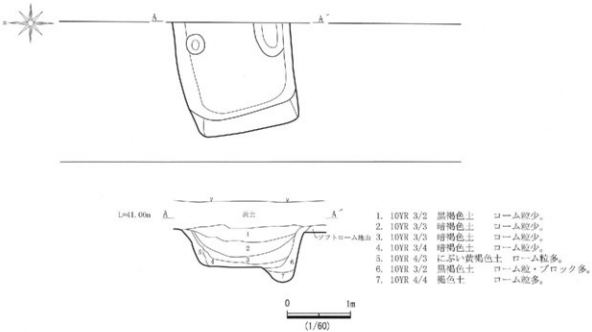
第16図　2号土坑実測図

本遺構は，7号墳の周溝内より検出された。調査区内で確認し得た遺構の規模は，長軸が0.60mで短軸が0.28mを測る。遺構確認面から土坑底部までの深さは0.04mと浅い。遺構の殆どが調査区外の東側へと延びている為，平面形状は不明である。遺物は覆土中より出土した2個体の「かわらけ」があり，この2個体ともに墨書が施される。この墨書はどちらも「かわらけ」の口縁部付近に施されており，ひとつが漢数字の「二」，もうひとつが漢字の「山」と読めるものである。これらの遺物の特徴から，本遺構の帰属年代は中世に含めた。

第5項　時期不明の土坑

1号土坑（写真23・24，第17図，表－2）

写真23　1号土坑 全景　西から



第17図　1号土坑実測図

本遺構は，調査区の東側に走る既存の市道に沿った位置から検出された。確認し得た遺構は全容の一部であり，遺構の延長は調査区外の東側へと延びている為，遺構本来の平面形状は不明である。確認し得た遺構の平面形状は不整な長方形を呈し，長軸が1.20mで，短軸が1.18mを測り，遺構確認面から土坑の底部までの深さは0.37mである。遺構の覆土は褐色土を主体とする6層が互層をなし，全体的に締まりは無い。本遺構の覆土中からは，弥生土器の破片2点も出土しているが，本遺構に伴うものかは不明である。掘削方法や形状にも帰属を特定しうる特徴は認められない。従って，本遺構は時期性格共に不明の土坑として報告する。

第4章　総　括

第1節　遺跡の概観

今回発掘調査を行った「御前塚古墳群・北浦東遺跡」は，御前塚古墳，藤塚古墳の大型円墳2基を盟主とし，これらを取り巻く様に築造された，大型円墳の陪冢と考えられる中～小型の円墳9基（消滅したものも含む）から構成された古墳群と，縄文時代から近世までの年代幅を持つ集落跡の複合遺跡である。今回の調査によって明らかとなった遺構は，弥生時代の住居跡と考えられる竪穴状遺構が2軒，御前塚古墳，藤塚古墳，7号墳，8号墳の周溝の一部，そして藤塚古墳の周溝底部からは，副葬品を伴う小型箱式石棺が1基，中世のものと考えられる土坑1基と時期不明の土坑1基である。調査区の制約上，遺跡の全容解明には至らなかったが，本遺跡では現在まで検出されていなかった弥生時代の遺構と，古墳群が造営され機能していた時期の一端を想定しうる興味深い資料を得る事が出来た。以下は時代を追って纏めた調査成果の検証である。

第2節　弥生時代

当該遺跡の所在地である旧岩間町おいて，弥生時代の遺物が確認されている遺跡は22箇所を数える。このうち，中期の土器が出土している遺跡は，1世紀後半頃に帰属すると考えられている「足洗式土器」が出土した上郷堂山Ⅱ遺跡1箇所のみで，その他22箇所の遺跡から出土している土器は全てが後期の所産と考えられるものである。これら後期の遺物が主体となる遺跡が多いのは，旧岩間町周辺（岩間地方）においても同様で，現段階でも周知されている中期以前の遺跡は少ない。これらの事例は，弥生人が岩間地方に本格的なムラを構成し始め，安定した集落形成を確立したのが後期以降からであった事を推測しうるものである。旧町内に所在する後期の遺跡の中で，出土した土器の形式が判るものでは，安居地区の塚原（東平）遺跡，押辺細川遺跡の2遺跡から出土した，2世紀後半頃の帰属とされる大洗町鎗釜遺跡が標識となる「鎗釜式土器」や，福島息栖神社境内遺跡，福島谷原東遺跡，塚原遺跡，細川遺跡の4遺跡では，3世紀前葉の帰属と考えられている十王町十王台遺跡の出土土器を標識とした「十王台式土器」がある。また，先述の塚原遺跡や押辺竹ノ下遺跡では，鬼怒川中～上流域に分布の中心を持つ「二軒屋式土器」の影響を強く受けていると思われる土器の出土もある。

第18図　旧岩間町内における弥生時代の遺跡分布状況図

今回の発掘調査によって検出された弥生時代の帰属と考えられる遺構は住居跡が２軒である。この２軒の住居跡は，いずれも遺構の一部のみの検出であり，遺構形状等の全貌は明らかとなっていない。確認し得た双方の住居跡では，柱穴等のピット類の検出は無く，２号住居跡で地床炉の痕跡を検出したに過ぎない。従って遺構の特徴から本遺構の帰属年代までを特定する事は不可能である。しかし，１号住居跡の覆土中から10点，２号住居跡の覆土中から１点，１号土坑の覆土中から２点の弥生時代後期に比定しうる土器の破片が出土している。このうち，今回図示し得た遺物は，２号住居跡より出土の土器１点と，時期，性格不明として報告した１号土坑から出土した土器２点の合計３点である。下図は今回出土した弥生土器の実測図と写真である。

第19図　２号住居跡・１号土坑 弥生土器実測図．写真24

表－２　２号住居跡・１号土坑出土弥生土器 観察表

遺構	No.	器種	器形	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2住	1	土器	壺類?	−	−	−	胴部破片。	縄の調文が斜位に施される。	内 7.5YR4/2 外 2.5Y4/2	内黒 少 断石 少 黒雲 微	普通	
1土	2	土器	壺類?	−	(1.9)	(9.2)	底部破片。底面は平底で，この面には明瞭な木製品を有す。	縄の調文が斜位に施される。	内 10YR5/2 外 2.5Y3/2	内黒 微 断石 少 雲母 多	良好	
1土	3	土器	壺類?	−	−	−	胴部破片。	縄の調文が斜位に施される。	内 10YR5/2 外 2.5YR4/1	内黒 微 断石 少 白粒 少	良好	

第20図　参考資料「石川　均 1985『免の内台遺跡調査概報Ⅰ』芳賀町の文化財第10集 栃木県芳賀町教育委員会」

第11図　遺構外出土弥生土器実測図　　※27～39・50後期二軒屋式

上図の通り，２号住居跡から出土した実測図１の土器は，壺類胴部の破片であると考えられ，表面全体には細かな縄文が斜位方向に施される。次に１号土坑より出土の実測図２の土器は壺類の底部であり，底面には明

瞭な木葉痕を観察できる。同じく１号土坑より出土の実測図３は，実測図１と同様に壺類胴部の破片であると思われ，表面には細かな縄文が斜位方向に施される。今回図示した遺物のみで形式までを言及する事は難しいが，施文の雰囲気は，後期後半の「十王台式土器」と併行期にある，宇部宮市二軒屋遺跡を標識とした「二軒屋式土器」の影響を少なからず受けている可能性を示唆する事は出来ないだろうか。出土した遺物が当該遺構に伴うものであるならば，これらの遺構の帰属年代は後期に比定されよう。今回掲示し得た資料は僅かではあるが，当該地区及び周辺の「弥生時代のムラ」の全容解明の一助となれば幸いである。以後の調査成果の充実に期待したい。

第３節　古墳時代（古墳群）

旧岩間町内には，大小併せて多数の古墳群の所在が明らかとなっている。その中でも，今回発掘調査を行った「御前塚古墳群」の御前塚古墳と藤塚古墳の円墳２基は，旧町内では最も大きな古墳であると考えられており，築造された時期も最古のものであると考えられている。まずは調査成果の検証に入る前に，旧町内に所在する「御前塚古墳群」を除いた，主となる６箇所の古墳群の性格についても若干触れておきたい。以下は平成14年に刊行された「岩間町史」を参考とし，文章の一部を抜粋，引用し纏めたものである。

－　二子塚古墳群　－

本古墳群は旧町内，「市野谷」の北側の微高地に所在しており，現在，東宝ランドと岩間第三小学校に隣接する山林中に３基の古墳が確認されている。１号墳の規模は，直径が25m，高さが２mを測る円墳であると思われ，東宝ランドの一角に保存整備され実在している。埴輪や土器の出土は無い。２号墳は１号墳の北側約600m先に所在し，現在確認しうる墳丘の規模は，直径約5mで高さが約1mであるが，もともと正確な規模や形状が不明な古墳である。３号墳は２号墳に隣接する円墳と考えられる古墳で，墳丘の規模は，直径が約25mを測り，高さは約２mである。この古墳からも埴輪等の遺物の出土は認められない。本古墳群の構築時期は不明。

－　下安居古墳群　－

涸沼川南岸に位置する「下安居地区」に分布する古墳群で，現在では４基の古墳の所在が明らかとなっている。１号墳はこの古墳群の最西端に位置し，土塁の廻された中世屋敷跡の北側の山林中に所在している。古墳の形状は円墳であると思われ，規模は直径が約30m，高さ約２mを測る。埴輪等の遺物の出土は無い。２号墳は１号墳から僅かに離れる程度で，ほぼ隣接している。現存する墳丘は直径約5m，高さが約1.5mであるが，もともと正確な規模や遺物の有無については不明の古墳である。３号墳は１号墳の約500m東側に位置する古墳で，道路に近接する竹林中に所在している。この古墳は円墳であると思われ，直径約10m，高さ約1mを測る。
この古墳からも埴輪等の遺物の出土は無い。４号墳は３号墳から更に約200m東側に離れた位置に所在する。古墳の規模は，直径が約10m，高さ約１mを測り，形状は円墳であると思われる。この古墳の周囲からは埴輪片が採集されている事から，本遺構は埴輪を伴う時期の古墳であると考えられている。

－　塚原古墳群　－

下安居古墳群から涸沼川沿いを遡った「上安居地区」の微高地に分布する古墳群で，現存するのは帆立貝式前方後円墳１基と円墳３基であるが，常磐自動車道建設に伴う発掘調査後に消滅した，帆立貝式古墳１基と通常の円墳１基を併せると，もともとは６基から構成される古墳群であった。１号墳は直径が約20mで高さは約1.5mを測り，前方部がやや低くなっている。遺物の出土は認められない。２号墳は屋敷内の山林中に所在しており，直径が約30mで高さが約3mを測る。古墳の形状は円墳と考えられるもので，遺物の出土は無い。３号墳は２号墳に近接して構築されており，直径約10mで高さは約1mを測る。古墳の形状は２号墳と同様に円

墳であると思われ，こちらも遺物等の出土は認められない。４号墳は１号墳の約400m東南側に位置し，直径約25mで高さは約４mを測る比較的大きな円墳である。現在の墳頂部には「山倉神社」が鎮座しており，地元では「天王塚」の名で呼称されている。墳丘の周辺からは須恵器甕の破片が採取されており，これらはこの古墳に伴う遺物であると考えられている。常磐自動車道建設時に発掘調査を行った帆立貝式古墳（１号墳）は，全長約20mの規模を持ち，高さは約1.5mを測る。前方部には箱式石棺が設けられており，この一部と思われる石材も出土している。箱式石棺の長軸は主軸と平行する。石材以外の遺物の出土は認められない。併せて調査が行われた円墳（２号墳）は，直径約24mで高さは約３mを測る。埋葬施設や墳輪などは確認されず，築造時期や性格等は不明である。塚原古墳群の成立は，これまでに確認された墳輪片等により，６世紀代に入ってから造営されたものと考えられている。

－ 高龍古墳群 －

涸沼川の南岸，「土師地区」の台地上に分布する古墳群で，高龍神社境内を中心に７基の古墳から構成されている。１号墳は直径約20mで高さ約３mを測る円墳で，古墳群の中で最も東側に位置している。墳輪等の遺物の出土は認められない。２号墳は１号墳の西側に位置しており，現在は屋敷内の山林中に箱式石棺の一部が露出しているのみで，本来の古墳の形状と規模は不明である。３号墳は２号墳の南側に位置する，直径が約20m，高さが約２mの円墳で，出土遺物等は不明である。４号墳は神社境内の参道横に位置する円墳で，規模は直径が約20m，高さは約2.5mを測る。出土遺物は確認されていない。５号墳は４号墳の北側に位置する古墳で，規模は直径が約10m，高さは約１mを測る円墳であると思われる。出土遺物は確認されていない。６号墳は当該古墳群の中では最大の規模を誇る円墳で，直径が約25m，高さは約３mを測る。墳輪等の遺物の出土は認められない。７号墳は古墳群の最西端に位置する小規模な円墳で，直径が約10mで高さは約1mを測る。出土遺物等に関しては不明である。本古墳群の特徴は，現況では全てが円墳で構成されている事と，各古墳から１点の墳輪（破片）も確認されていない事である。

－ 花園古墳群 －

随光寺川の北岸にあたる「花園地区」の台地上に分布する古墳群で，東西約200mの範囲内に，円墳19基と石積出土地点２箇所が所在している。１号墳は古墳群の東端に位置し，個人墓地に近接した山林中に構築されている。規模は直径が約20mで，高さは約２mを測る。遺物の出土については不明である。２号墳は１号墳の北側に隣接して所在し，規模は直径約15mで高さは約２mを測る。こちらも遺物の出土については不明である。３号墳は２号墳の北西に位置する古墳で，規模は直径が約10m，高さは約1.5mを測る。出土遺物については不明である。この古墳の現況は，墳頂部が大きく削平を受けている。４号墳も墳頂部を大きく削平された古墳で，直径は約20mで高さは約３mを測る。遺物の出土については不明である。５～７号墳の３基の古墳は，この４号墳の南側に位置し，３基とも直径が約10mで高さが約１mの規模である。遺物の出土については不明。８号墳は７号墳の北側に位置する直径約20mで高さが約３mを測る比較的大きな古墳である。遺物の出土については不明。８号墳の西側に所在する９～12号の４基の古墳は，いずれの規模も直径が約10mで高さは約１mを測る低墳丘墳である。現況は雑木林となっている為，所在の確認には困難を要す。遺物等の出土については不明である。13～14号の２基の古墳は，道路脇の山林に所在する古墳で，いずれも直径が約10m，高さは約１mを測る低墳丘墳である。遺物の出土については不明。15号墳は個人墓地に隣接して所在する，直径約20m，高さ約３mを測る，比較的大きめな古墳である。遺物等の出土に関しては不明である。16号墳は，現況では耕作地の中に位置している事から削平を受け，古墳の状況を留めていない。しかし，かつてこの古墳からは箱式石棺が検出され，この中から副葬品と考えられる「直刀」や「勾玉」が出土しているとの事。これらの出土遺物

は，現在，上浦一校に所蔵されていると言う。17号墳は道路脇の個人墓地内に所在する直径約20m，高さ約2mを測る古墳である。遺物等の出土に関しては不明。18号墳は古墳群の西端に位置し，規模は直径が約10mで高さは約2mを測る。遺物等の出土については不明。19号墳は18号墳の北側に位置する，直径約10m，高さ約1.5mを測る古墳である。こちらも遺物の出土については不明である。20号墳は古墳が密集する地点の北側に位置し，規模は直径が約10mで高さは約0.5mを測る低墳丘墳である。遺物等の出土については不明。21号墳は古墳群の最東端に位置し，現況は宅地内に箱式石棺の石材と思われる板石が積み重ねられている状況であり，古墳の状況は留めていない。しかし，石材の出土から考えると，この地に古墳が所在していた事は確実であると考えられる。遺物等の出土に関しては不明である。

一 堂山古墳群 一

本古墳群は花岡古墳群の北側に位置する「堂山地区」に分布するもので，標高約100mの山地に円墳が2基と，その東麓に4基の古墳が点在している。1号墳は古墳群の最東端に位置する古墳で，直径は約10m，高さは約0.5mを測る。が，近年の竹林開墾により削平を受けてしまい，古墳の殆どが消滅してしまう。しかし，この開墾中に墳丘の南裾部にあたる場所より箱式石棺が出土した事から，特異な位置に埋葬施設を持つ古墳である事が明らかとなる。出土遺物の有無は不明である。2号墳は1号墳の西側に位置しており，現況は栗畑の中に所在している。古墳の規模は，直径が約10mで，高さは約0.5mを測る低墳丘墳である。遺物等の出土については不明。3号墳も栗畑の中に所在するもので，現在では古墳の状況を留めていないが，かつてこの場所からは「直刀」が出土したとされている。古墳の規模，形状は不明である。4号墳は山の東麓に位置する石棺の出土地点で，現在もこの場所に石棺の石材が集められている。古墳本体はその姿を留めていない。発見当時，この石棺内からは「直刀」や「玉類」が出土したと言う。詳細は不明。5号墳は標高約100mの山中に所在する，直径約15m，高さ約1.5mを測る円墳であり，その近くに古墳径が約20m，高さが約2mを測る6号墳が所在する。この2基の円墳からは埴輪を含む遺物の出土は認められない。

以上が旧町内に所在する6箇所の古墳群の概略である。記述の通り，殆どの古墳が未調査であり，採集された遺物も僅かである事から，現段階では各古墳の性格や造営年代の位置づけを特定する事は困難な状況である。今後における，現地での発掘調査の実現と，現地踏査も含めた分布調査による資料の充実によって，これらの古墳群の性格が解明されてゆく事を強く望みたい。

続いて，今回発掘調査が行われた，御前塚古墳と藤塚古墳が属する「御前塚古墳群」について概観する。

一 御前塚古墳群 一

本古墳群は，筑波山塊に連なる愛宕山の東南麓の台地上に所在する。この古墳群は，御前塚古墳と藤塚古墳の大型円墳2基を中心とし，宅地開発等で消滅したものを含めると，合計古墳9基以上から構成されていたと思われる。1号墳（御前塚古墳）は「岩間町公民館（旧岩間第一中学校）」の敷地内に所在する，旧町内でも最大規模を誇る円墳である。古墳の規模は直径が約60m，高さは約6.5mを測り，墳頂部平坦面は直径約20mである。平成11年には，町史編纂事業に伴い，墳丘から周溝部にかけて，範囲確認の目的でトレンチ調査が実施されている。この結果，墳丘は3段築成で，周溝の幅員は約20mを測る事が明らかとなり，周溝を含めた古墳としての全長（直径）は約100mに及ぶことが判明している。このトレンチ調査の際には多数の埴輪片も出土しており，これらの遺物に関しては　井　博幸 2006『御前塚古墳・藤塚古墳の埴輪』婆良岐考古第28号・井　博幸 2007『御前塚古墳出土の埴輪』婆良岐考古第29号，婆良岐考古同人会」に詳しく纏められている。現段階では古墳の主体部は不明であるが，かつて，墳丘の南裾部には箱式石棺が露出していたという。本古墳の築造時期は，採集した埴輪に黒斑が付いていた事から，霞ヶ浦沿岸に所在する，県内最大規模の大型古墳である石岡

市「舟塚山古墳（前方後円墳，全長約186m）」と同時期に帰属する5世紀前半であると考えられている。古墳の現況は，梅や桜の植栽が施され，墳頂部には四阿が設けられ公園化されている。2号墳（藤塚古墳）は1号墳の南側約80m先に位置する大型の円墳である。古墳の規模は，直径が約55mで，高さが約6.5mを測り，古墳の北東側には幅広い周溝の痕跡を見る事が出来る。墳頂の平坦部は直径約15mを測り，現在この墳頂部には「藤原藤房」を顕彰した記念碑が建つ。墳丘の遺存状況は良好で，墳丘斜面は低木や小笹が密集して自生する事により保護され，比較的旧態を留めているものと思われる。こちらの古墳も主体部については不明であるが，墳丘外の南側の宅地内には，破壊された状態の箱式石棺と，棺材の一部であったと考えられる板状の石材が露出する地点がある。遺物は墳丘南側の参道石段付近と西側の畑地より埴輪片が採集されている。これらの遺物に関しても「井　博幸2006『御前塚古墳・藤塚古墳の埴輪』婆良岐考古第28号．婆良岐考古同人会」で詳しく検証されている。本古墳の築造時期については，先述の1号墳と前後して築かれたものと思われるが，採集した埴輪片から本古墳のほうが若干先行する可能性も考えられる。3号墳は1号墳の西南約500m先の畑地内に所在し，規模は直径が約15m，高さは約1.5mを測る円墳と思われ，墳頂部付近には石棺のものと考えられる石材が露出している。埴輪等の遺物の存在は認められない。4号墳は1号墳の西北約400m先に所在する「六所神社」境内にある古墳で，直径約15m，高さ約1.5mを測る円墳であったと思われる。出土遺物等は確認されていない。5号墳は1号墳の東側約500m先の道路脇に所在する古墳であるが，現況は著しい削平を受けている為，約0.5mの高まりと箱式石棺の石材4枚が存在するのみで，本来の規模や形状については不明である。6号墳は1号墳の西側約100m先に所在していた古墳。現在は住宅地となっており，古墳は消滅している。宅地造成時に石棺が出土している。7号墳は2号墳東側に所在するが，削平により変形し原形を留めていない。8号墳は7号墳と並列し所在する円墳で，現存する墳丘の直径は約6mで高さは約1mを測り，墳頂部には石塔？の部材が散乱している。9号墳は7号墳の東側に所在しているが，墳丘裾部が削平を受けている為変形している。現況の規模は直径約15m，高さは約2mだが，本来は直径20mを超える大型の円墳であった事が想定される。遺物の出土は無い。

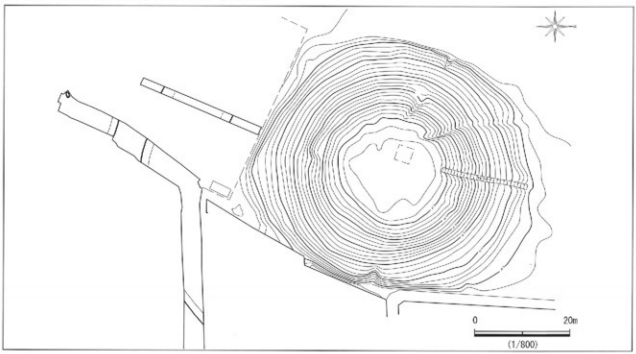
第21図　御前塚古墳群の分布状況

以上が今回の発掘調査以前までに確認し得ている「御前塚古墳群」の概略である。本古墳群においても，未調査の古墳が多く，まだまだ未解明な部分も多い。今後の古墳群の全容解明に向けた発掘調査の実現と資料の蓄積に期待したい。次項では今回発掘調査を行った各古墳ごとに成果を検証し報告する。

第1項　御前塚古墳（1号墳）

今回の市道改良工事に伴う発掘調査によって，若干の埴輪片の出土と，周溝の一部ではあるが，その形状と幅員が明らかとなった。併せて，公共座標に乗せた墳丘本体の測量調査も実現している。これらの成果を図面と写真を多用しながら検証結果として報告したい。下図は今回測量した墳丘と周溝の実測図である。

第22図　平成19年度実施の御前塚古墳実測図



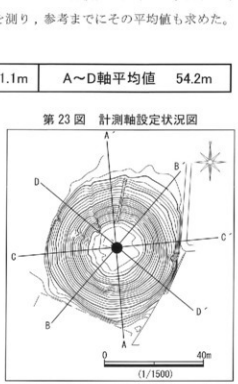
まずは，今回改めて行った墳丘測量の成果をもとに，墳丘の最大径について再検証を試みたい。方法は，墳丘の中心部と考えられる位置を通した4つの軸線上で墳丘の直径を測り，参考までにその平均値も求めた。

表－3　軸計測値

A軸　59.8m	B軸　53.2m	C軸　51.4m	D軸　51.1m	A～D軸平均値　54.2m

上表の通り，各軸線上の計測値にはばらつきがあり，その最大値はA軸が59.8mで最小値がD軸の51.1mである。この事は，墳丘が人為的な削平を受けた事による変形が理由であり，特に最小径を測る宅地と市道に接したD軸の東側は，墳丘測量図の等高線を見ても明確なほど古墳裾部が変形している。以上の理由により，4つの軸の平均値は，現在まで考えられている最大径「約60m」には届かない。しかし，永年にわたる風雨等の浸食により，墳丘斜面部及び裾部の構築土は外方向けてに流れ出し，古墳築造当初より裾部が広がっている事が推測されるものの，4本の軸の中で，最も旧態に近い状況を保っていると思われるA軸を基準として考えた場合，今まで通り，墳丘の最大径は「約60m」と考えても間違いはないものと思われる。

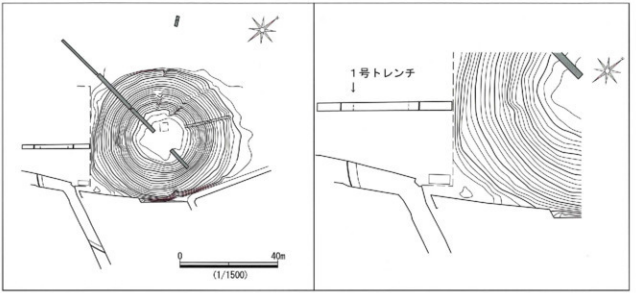
第23図　計測軸設定状況図



続いて，墳丘を囲む周溝について検証したい。今回の発掘調査では，新規に市道を施工する「くの字状」を呈した調査区内にて，墳丘南側に所在する周溝外郭と周溝底部平坦面の一部を検出している。しかし，この調査範囲内では周溝内側の立ち上がり部分は検出されず，周溝の幅員まで確認する事は出来なかった。

「岩間町史」によると，平成11年に行われた町史編纂事業に伴うトレンチ調査によって，本古墳の周溝の幅は約20mを測る事が確認されていると言う。しかし，残念ながら今回の発掘調査時には当時の成果を参照する事は叶わなかった。そこで，本来今回の本調査範囲には該当しない箇所ではあるが，公民館館長である鈴木利通氏の全面的な協力のもと，公民館用地の一部にトレンチを設定する事とし，改めて本周溝の幅員確認調査を実施する運びとなった。調査の方法は，墳丘南側に位置するゲートボール用グラウンド（旧テニスコート）横に，墳丘と直交するよう，幅1.6m，全長27mのトレンチを設定し，まずは周溝の確認面までを重機にて掘削し，その後人力による精査を行い周溝プランの検出に努める事とした。下図がトレンチ設定状況図である。

第24図　1号トレンチ設定状況図　※網掛けの入ったトレンチは平成11年に調査が実施されたものである。



周溝のものと考えられる覆土は，現地表面から0.3～0.4m下方にて確認され，まずはこの確認面の精査を行い，プランを確定させた。その後，さらに周溝外郭の立ち上がり部と中央部，そして周溝内側の立ち上がり部の3箇所にサブトレンチを設定し，人力による掘削調査を主として周溝の形状と深さの確認を行った。

以下の写真と実測図は，その調査状況の記録である。

写真25　1号トレンチ完掘．周溝幅員確認状況

写真 26　1号トレンチ 調査状況－1

写真 27　1号トレンチ 調査状況－2

写真 28　1号トレンチ 調査状況－3

写真 29　1号トレンチ 調査状況－4

写真 30　1号トレンチ 調査状況－5

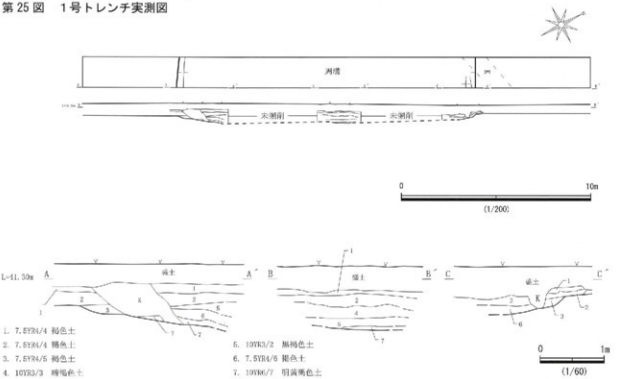
写真31　1号トレンチ 調査状況－6

写真32　1号トレンチ 調査状況－7

写真33　1号トレンチ 調査状況－8

写真34　1号トレンチ 調査状況－9

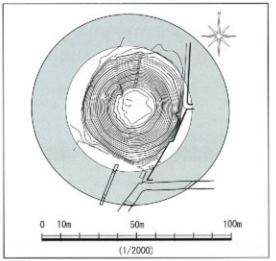
第25図　1号トレンチ実測図



サブトレンチ断面図－1　サブトレンチ断面図－2　サブトレンチ断面図－3

以上の通り，今回設定したトレンチ調査により得られた成果を纏めると，まず，現地表面から周溝の確認面までの深さは下方に約0.3～0.4mであり，この位置での周溝の幅員は16mを測る事が明らかとなった。そして，トレンチ内に設定した3箇所のサブトレンチによって，緩やかに立ち上がる周溝外郭と内側両方の立ち上がり部分の状況と，周溝中央部の底面形状を把握する事が出来た。周溝確認面から周溝底面までの深さは最深部で約0.6mを測り，覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積を成す。また，周溝の内側から墳丘裾部までの距離は約3.5mを測る事も判明した。

第26図　墳丘を廻る周溝の推定線－1



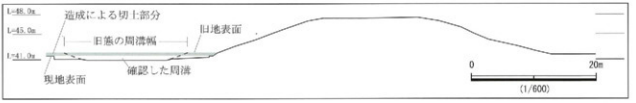
先述したように，このトレンチ調査は，本調査範囲外にて急遽行われた確認調査であった為，トレンチ内で検出した周溝を全掘するまでには至らなかった。しかし，調査結果は周溝の規模と形状を把握するには十分な成果をもたらしたと言えよう。この成果に基づき，本周溝が真円に近い環状で墳丘を廻ると考えれば，古墳全体の推定最大径は約104mである。この数値は，平成11年の町史編纂時に行われたトレンチ調査の成果により記された，「古墳全体としては全長約100mの大型円墳である。」と言う「岩間町史」の記述と等しく，大きな差違は認められない。続いて補足となるが，本古墳に隣接する「旧岩間第一中学校」のグランド造成時には，墳丘を避けて約1m近い表土を削平したとの話しである。これを裏付ける痕跡として墳丘西側～南側の裾部では明瞭な削平痕を観察する事が出来る。まずは下の写真を参照して頂きたい。

写真35　削平状況－1

写真36　削平状況－2

上の写真の通り，現況ではグランド面から墳丘裾部までの段差は約0.7m～0.9mを測る。この状況から，今回の測量成果と併せて旧地形を想定した断面図を作成してみた。

第27図　御前塚古墳断面図

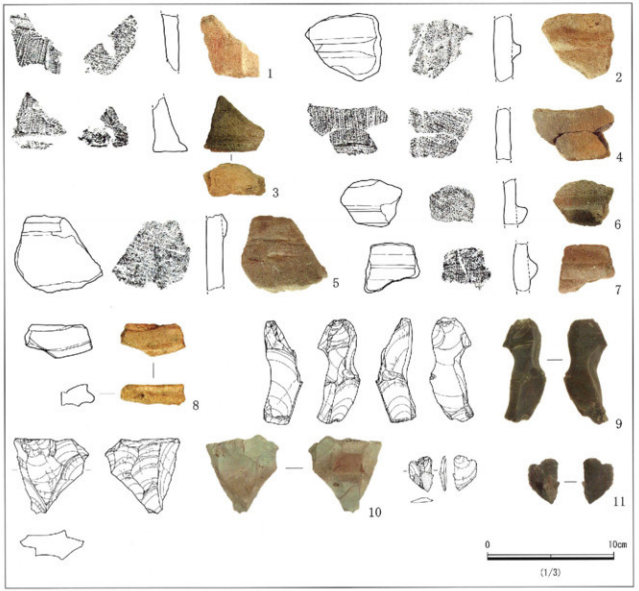


上図のトーンの部分が，過去に削平を受けて消滅した旧地表面の予想復元ラインである。この復元ラインが旧態に近い状況であるとするならば，若干の起伏は予想されるものの，古墳築造当初の周溝の深さは，約1m前後

であった事が推測できる。そして，周溝の幅員についても，今回確認した外郭と内側立ち上がり部分の傾斜がそのまま延長するものと考えた場合，今回の調査成果よりも若干幅広な約20mとなり，古墳全体の最大径も約108mを測る事となる。しかし，この検証結果は，現段階で確認しうる希薄な状況証拠のみで可能性を想定したものに過ぎない。従って，あくまでも参考までの試みである事を付け加えておく。

続いて，今回出土した遺物について記述する。今回の発掘調査によって出土した遺物は，周溝覆土中より，埴輪の破片が113点と，表採遺物を含む石器が3点である。このうち図示し得たのは，埴輪の破片が8点と石器が3点である。下図はその実測図と写真である。

第28図 ， 写真37 御前塚古墳周溝出土遺物



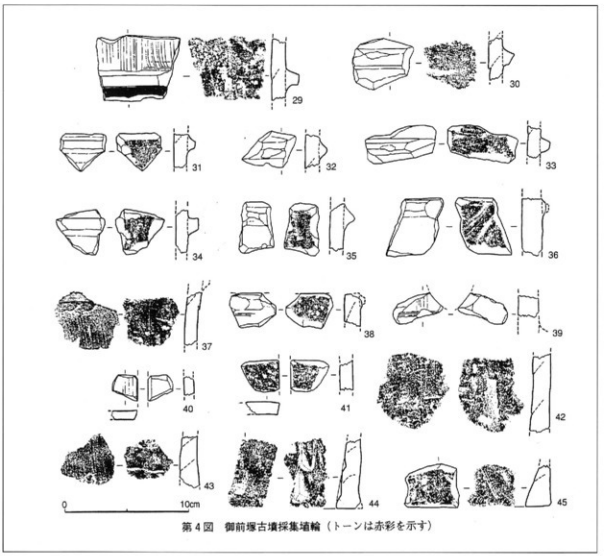
表－4 御前塚古墳周溝覆土出土埴輪・石器 観察表

遺構	No.	種類	器形	口径	器高	底径	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	備考
周溝	1	埴輪	円筒				胴部破片，断面が観察される。	外面に縦ハケ。	内 7.5YR6/4	石英 少	良 好	
			朝顔						外 7.5YR5/4	長石 多		
周溝	2	埴輪	円筒				胴部破片，突帯が観察される。	突帯部はヨコナデ。	内 10YR5/3	石英 少	良 好	
			朝顔						外 10YR6/3	長石 多		
周溝	3	埴輪	円筒				胴部破片。	外面に縦ハケ。	内 10YR6/3	石英 少	良 好	
			朝顔						外 10YR5/2	長石 多		
周溝	4	埴輪	円筒	—	—	—	胴部破片。	外面に縦ハケ。	内 7.5YR5/4	石英 微	良 好	施設有り
			朝顔						外 7.5YR5/3	長石 多		
周溝	5	埴輪	円筒	—	—	—	胴部破片，突帯が観察される。	外面に縦ハケ。	内 10YR6/4	石英 少	良 好	
			朝顔				器台に接続する。		外 10YR5/2	長石 多		
周溝	6	埴輪	円筒	—	—	—	胴部破片，突帯が観察される。	突帯部はヨコナデ。	内 7.5YR6/4	石英 少	良 好	施設有り
			朝顔				器台に接続する。		外 10YR5/2	長石 多		
周溝	7	埴輪	円筒	—	—	—	胴部破片，突帯が観察される。	突帯部はヨコナデ。	内 2.5YR5/2	石英 少	良 好	
			朝顔						外 2.5YR5/2	長石 少		
周溝	8	埴輪	円筒	—	—	—	胴部破片，突帯が観察される。	片面に有すき平straight線状の調整	内 10YR5/3	石英 少	良 好	
			朝顔						外 10YR6/3	長石 多		
周溝	9	石器	スクレイパー	—	—	—	下ヒ，長4.5cm・幅3.3cm・厚2.2cm		SiO2 72%			
周溝	10	石器	スクレイパー	—	—	—	長3.7cm・幅3.7cm・厚2.1cm					
周溝	11	石器	スクレイパー	—	—	—	剥片，長2.9cm・幅1.6cm・厚0.5cm					

第33図．写真41に掲載した出土遺物は，いずれも本周溝の覆土中より出土した一括遺物である。遺物No．1～8までの8点は埴輪の破片である。このうちNo．1・4・5の遺物は胴部の破片と考えられ，外面調整の縦ハケを顕著に観察する事ができる。そして，No．1・5には赤彩が施されていた痕跡があり，No．4では黒斑の一部も認められる。続いてNo．2・6・7の遺物は，埴輪の胴部に附された突帯部分の破片であり，No．13の遺物には赤彩が施され，No．4と同様に黒斑も認められる。No．8も突帯部分の破片であると思われるが，片面にはナデを施した様な整形面を持つ。No．3は縦ハケが施される底部の破片である。残る3点の石器は他遺構からの混入したものと思われ，本遺構付近にはこの石器が伴う時代の遺構が所在する可能性が考えられる。今回出土した埴輪片の突帯の形状や調整方法は中期の埴輪に比定しうる特徴を有している。この結果は，「井 博幸 2006『御前塚古墳・藤塚古墳の埴輪』婆良岐考古第28号・井 博幸 2007『御前塚古墳出土の埴輪』婆良岐考古第29号．婆良岐考古同人会」にて詳細に検証されているものと等しい。これらの遺物が御前塚古墳に伴うものであるならば，本古墳の築造年代は，従来の通り5世紀前葉段階に帰属すると考えられよう。

最後に，下図は「井 博幸 2006『御前塚古墳・藤塚古墳の埴輪』婆良岐考古第28号．婆良岐考古同人会」から抜粋した「第4図 御前塚古墳採集埴輪」である。今回出土した埴輪片との比較資料として掲載させて頂いた。

第29図　抜粋資料「井 博幸 2006『御前塚古墳・藤塚古墳の埴輪』婆良岐考古第28号．第4図 御前塚古墳採集埴輪」



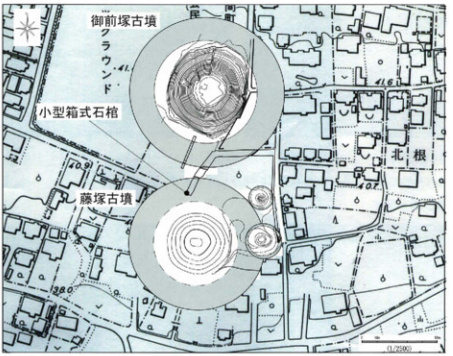
第4図　御前塚古墳採集埴輪（トーンは赤彩を示す）

第2項　藤塚古墳（2号墳）

今回の発掘調査によって明らかとなった遺構は，本古墳の周溝の一部と，周溝底部より検出された小型箱式石棺が1基のみである。遺物の出土は，周溝の覆土中では1点も確認する事が出来なかったが，周溝底部に構築された箱式石棺の中からは，滑石製の臼玉が269点と，同じく滑石製の勾玉が1点，そして遺存状況の良い完形の土師器坏が2点出土している。まずは確認し得た周溝の形状と規模について考えてみる。

今回検出する事が出来たのは，墳丘の約18m北側に位置する周溝底面とその外郭の一部である。この周溝の底面はほぼ平坦で，北側で検出した外郭端部に向けて緩やかに立ち上がってゆく。そしてこの外郭端部と，隣接する御前塚古墳の周溝外郭端部の距離は，僅か5mしか離れていなかった事も判明した。この周溝外郭端部から墳丘の中心部までの距離を基準として考えた場合，周溝が真円に近い環状で墳丘を廻るものとすれば，本古墳全体の最大径は約88mである。周溝の幅員については，今回の調査では周溝の内側立ち上がり部分を検出する事が出来なかった為不明である。しかし，本古墳の築造時期が隣接する御前塚古墳と近いものであり，構造も近似していたと想定するならば，今回のトレンチ調査に拠って明らかとなった御前塚古墳の数値をそのまま当て嵌めて，周溝の幅員は約16mであったと推測する事も出来よう。また，この推測した数値が正しいものであると仮定した場合，今回発見された小型箱式石棺は，周溝のほぼ中央部に位置していた事になる。

第30図　墳丘を廻る周溝の推定線－2



この藤塚古墳の規模にする関連文献の記述には，御前塚古墳とほぼ同じ大きさの円墳であり，墳丘の直径は約56mを測ると記されているものがあるが，今回，都市計画図と航空写真を参考にして導き出した数値では，墳丘の最大径は約40mであり，現在まで考えられている墳丘の直径より一回り以上小さくなる。しかし，今回の成果をもとに示した，周溝を含めた古墳全体の推定最大径が約88mと言う数値を見る限り，御前塚古墳より僅かに小規模とみなされている記述は大きく違うものではない。本古墳の墳丘部分は本調査範囲外であり，一部民有地であるという制約から，今回は測量調査を行う事が出来なかった。この為，上記測量データは任意のものであり，公共座標に乗せた正規のものではない。まずは，本格的な測量調査によって，本古墳の形状と規模を正確に把握する事が必要であると考える。これらを今後の課題として提案したい。

次に，本古墳墳頂に鎮座する「藤原藤房卿」の記念碑について若干であるが触れておきたい。

この「藤原藤房（ふじわらのふじふさ）」は，藤原宣房の子であり，推定1295年生～没年不詳と考えられている。当時の藤房の身分は，鎌倉幕府を討滅し天皇親政を始めた（建武の新政）後醍醐天皇側近の公卿で，中納言・正二位。まさに当時の政権の中枢にあった人物であったとされている。しかし，後醍醐天皇が行った行賞の不公平に批判的であった事から，役職を辞して京都の岩倉に籠居し，その後出家したと言われている。

この記念碑が当地に建てられた経緯の概略は，現在は廃寺となってしまった「光西寺」より，藤房卿の法名である「無等良雄（むとうりょうゆう）」と刻まれた墓碑が発見された事が契機となり，高貴な俗名である「藤原藤房」の名も別の石碑に刻まれ，光西寺の神塚と崇められていた「藤塚」に記念碑として建てられたと言われている。昔は藤房卿の命日とされる10月10日には「藤原様のお祭り」が行われ，賑わいを見せていたとの事である。

この「藤原藤房卿」の墓碑や記念碑の類は全国各所に点在している。これらの多くは，江戸時代の南朝正統論の高まりの中から生まれた伝説により造されたものだとも考えられているが，その真相については不明である。

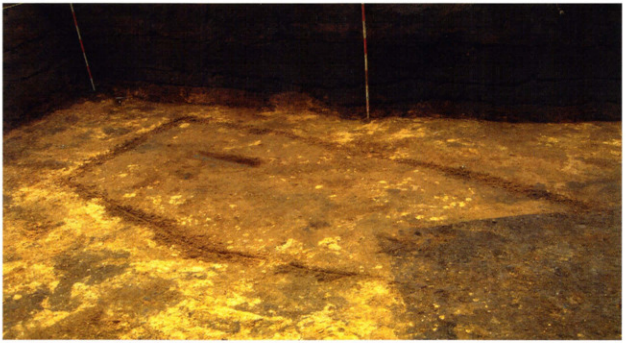
写真38　参道から記念碑を望む

写真39　記念碑近景

続いて，周溝底面から発見された小型箱式石棺について記述したい。

下の写真は，小型箱式石棺が埋納されていた掘り方の確認状況である。

写真40　掘り方プラン検出状況



本文中でも触れているが，本遺構の至近には下水の浸透桝が設置されており，その施工時の影響からか，遺構確認面付近には工業用の人工砕石が散り，一見このプランも現代の撹乱であるかの様相を呈していた。しかし，周溝完掘後に行った精緻な精査によって，本遺構の覆土中から小型箱式石棺の蓋石が検出されたのである。

以下はその調査の進捗状況に併せて随時撮影した記録写真を掲載したものである。

写真41　調査状況－1

写真42　調査状況－2

写真43　調査状況－3

写真44　調査状況－4

写真45　調査状況－5

写真 46　調査状況－ 6

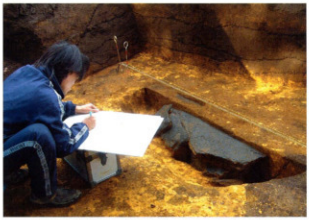


写真 47　調査状況－ 7

写真 48　調査状況－ 8

写真 49　調査状況－ 9

写真 50　調査状況－ 10

以上が調査状況の順を追って撮影した記録写真である。まずは本石棺に用いられている石材であるが，箱式石棺を構成する，大小併せて36個体を数える石材全ての特徴は，化学分析を行っていない為，産地の明言こそ避けるが，筑波系の雲母変成岩と似る黒灰色を呈した雲母変成岩である。本箱式石棺は，これらの石材が適所に組み合わされ構築されていた。以下は本箱式石棺の規模と構造及び調査方法についての解説である。

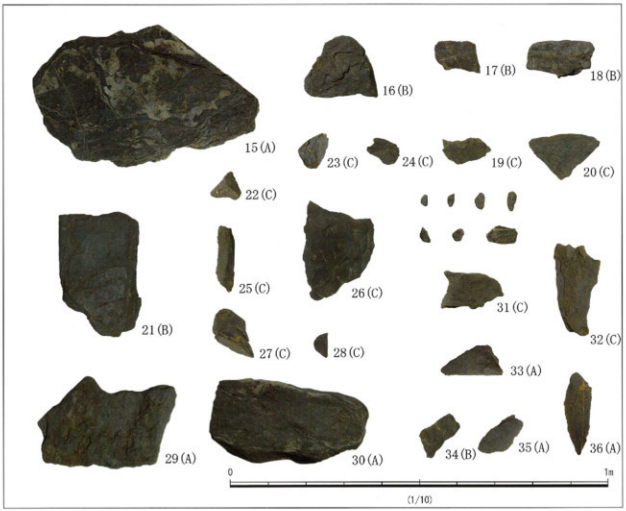
この小型箱式石棺の構造を大きく捉えると，長辺の側壁2枚，短辺の側壁2枚，蓋石1枚の合計5枚の石材により構成された単純な構造である事が分かる。また，これらの部材はいずれも重厚な単体の板状であり，これまで茨城県内で行われている発掘調査でも多数の検出例がある，各部材に複数の小型石材を組み合わせて構築された小型箱式石棺とは明らかに異なる構造を有している。まずは石棺を埋納する為に掘削されたと考えられる掘り方についてだが，この掘り方の平面形状は不整な楕円形を呈し，長軸寸法は1.73m で短軸寸法は1.05m を測る。そして，今回確認し得た，掘り方の確認面から底面までの深さは約0.45m である。石棺の蓋石は，この掘り方の確認面下約5cmにて姿を現す事となる。蓋石の寸法は，全長が1.19m，最大幅は0.61m で最小幅は0.21m を測り，厚さは約12cmである。そしてその重量は106Kg と少数の人員で移動するには困難なほど重い。蓋石の平面形状は，西洋の棺の形状と似る撥形を呈している。調査方法としては，蓋石検出状況での写真撮影及び微細実測の後，蓋石本体とその蓋石に組み付けられていた石材3枚を全て取り上げた。この際，蓋石と各側壁，及び蓋石に組み付けられている石材の隙間にはしっかりと粘土が充填されており，石材同士が固着している事が判明した。この状況は，本石棺が後世の人々の手にかかる事無く，今回の発掘調査が行われるまでの間，密閉されたままの状態を保持していたと考えても問題は無いであろう。次に，蓋石を取り外した石棺内部の状況であるが，現況は粘性も締まりも無い，サラサラとした細かなにぶい黄褐色土が一面を覆っていた。このにぶい黄褐色土は，状況から判断すれば，永年による雨水の浸食により土砂が流れ込んで堆積したものと考えられる。この覆土の調査方法は，まずは長軸で半裁して堆積状況を把握する事とし，慎重に掘削した覆土は，上～下層の3層に分け，現場にて精査を行った後，整理作業事務所にて再精査を試みるべく，覆土の全量を土嚢袋に詰め持ち帰る事とした。蓋石取り外し後の石棺側壁の配置状況は，平面形状は若干歪ではあるものの，ほぼ長方形を呈しており，長辺の側壁を短辺の側壁が止めるように配置されている。そして，石棺内部の底面には，不整に欠けた約30枚の石材が敷き詰められている。石棺を構成する為に組まれたこの側壁の平面規模は，最大長が1.0m で最大幅が0.4m を測る。断面形状では，側壁の頂部から石材が敷き詰められている石棺底部までの深さは概ね0.3m であるが，各側壁は，更に地山を約10cm下方まで掘り込んで掘設されている。また，箱式石棺の内法寸法は，長辺が0.8m で短辺が0.2m を測る長方形を呈している。次頁でこの小型箱式石棺を構成する石材を纏めた写真図版を掲載しているので参照して頂きたい。

写真51　調査状況－11

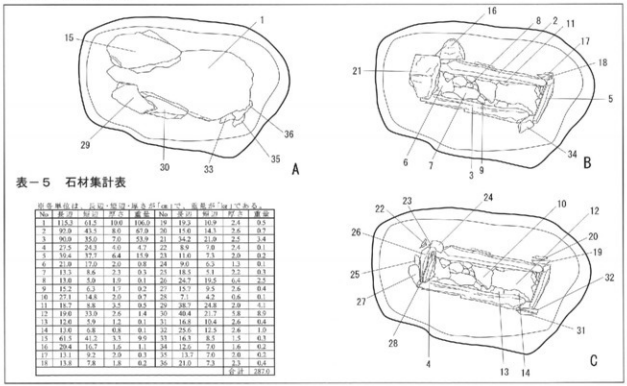
写真52　調査状況－12

写真 53　箱式石棺を構成する石材－ 1

写真54　箱式石棺を構成する石材－2



第31図　石材番号参照図



表－5　石材集計表

出典無記述：元石・間詰・抜き石「㎝」で、基底石「㎡」である。

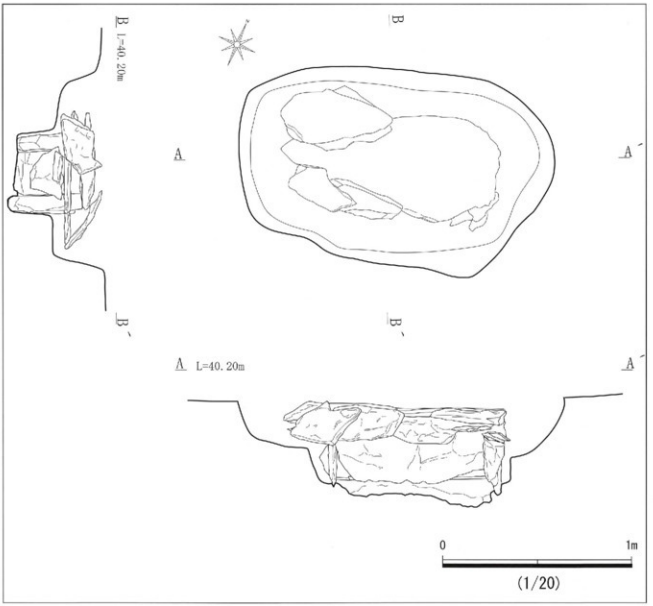
No	最大	最小	厚さ	重量	No	最大	最小	厚さ	重量
1	115.3	61.5	10.0	136.0	19	19.3	10.9	2.5	0.5
2	97.0	41.5	8.0	67.9	20	17.0	14.1	3.5	0.7
3	90.9	35.0	7.0	53.9	21	34.2	21.9	2.5	3.4
4	27.5	24.3	4.0	4.7	22	8.9	7.0	2.5	0.1
5	39.4	37.7	6.4	11.9	23	11.0	7.5	3.0	0.2
6	21.0	17.0	2.0	0.8	24	9.0	5.3	1.5	0.1
7	17.5	8.6	2.7	0.3	25	18.5	5.1	2.5	0.3
8	13.0	5.0	1.0	0.1	26	24.7	19.5	6.6	2.3
9	15.2	6.3	1.7	0.2	27	15.7	9.5	2.6	0.4
10	27.1	14.8	2.0	0.7	28	7.1	4.2	0.6	0.1
11	35.7	8.8	3.5	0.5	29	38.7	24.8	2.0	4.1
12	19.0	33.0	7.6	1.4	30	40.4	21.7	5.8	8.5
13	12.6	5.9	1.2	0.1	31	16.8	10.4	2.6	0.6
14	11.6	6.8	0.8	0.1	32	23.6	12.5	2.6	1.0
15	61.5	41.2	3.3	9.9	33	16.3	8.5	1.5	0.3
16	29.6	16.7	1.6	1.1	34	12.6	7.0	1.6	0.2
17	13.1	9.2	2.0	0.3	35	13.7	7.0	3.0	0.3
18	13.8	7.8	1.8	0.2	36	21.0	7.3	2.3	0.4
								計	287.0

写真掲載した各部材は，今後における復元展示等の活用に備え，発見時の状況を極力忠実に再現出来るよう，遺物番号と微細実測図，及び解体時に随時撮影した記録写真にて管理している。

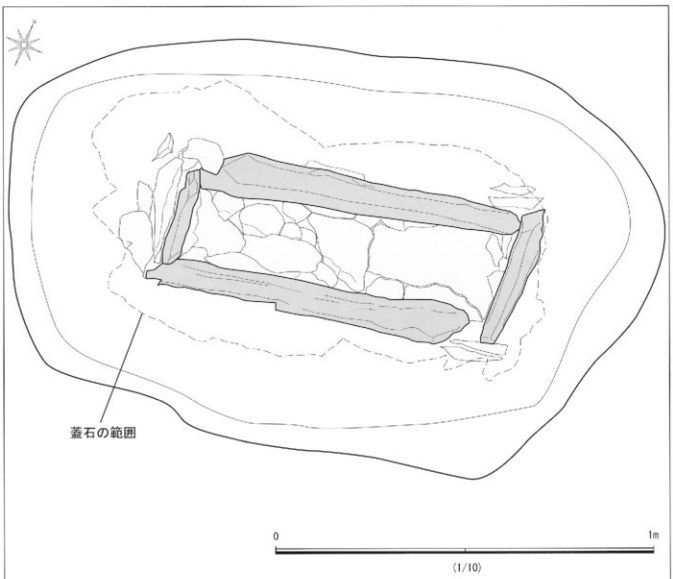
写真55　調査状況－13

写真56　調査状況－14

第32図　小型箱式石棺の微細実測図－1



第 33 図　小型箱式石棺の微細実測図－２



以上が今回の解体調査によって明らかとなった，小型箱式石棺の構造等に関する成果である。この成果をもとに私見を述べれば，この石棺内部の内法寸法は，長辺が約 80 ㎝で短辺が約 20 ㎝と狭いものである。従って，本石棺が遺体を安置する目的で構築されたものであるならば，構造的に幼児～成人を埋葬する事は物理的に難しいであろう。そうなると，この石棺内に無理なく安置されていたと思われる遺体は，新生児～乳児であった可能性が高いものと考える。７世紀中葉以降に増加傾向を辿る，改葬の可能性についても否定はできないが，本古墳の推定築造時期から考えれば，その可能性は低いものと思われる。また，茨城県内で発掘調査が行われた古墳では，副葬品のみを埋納する為に構築されたと考えられている小型箱式石棺も検出されているが，本石棺もその用途で構築されたものだとすれば，ここまで重厚な石材を用いて石棺を構築する必要があったのかどうかについて疑問が残る。最後に，出土した遺物について報告する。今回の小型箱式石棺の解体調査によって得られた遺物は，滑石製模造品の「臼玉」が 269 点と「勾玉」が１点，そして，遺存状況の良い，完形の土師器坏が２点である。これら全てが石棺内部からの出土である。また，石棺内部では遺骸は認められなかった。

まずは次頁の出土遺物実測図及び遺物写真図版を参照して頂きたい。

第 34 図，写真 57，表－6　滑石製模造品（臼玉）（1）

※単位は「径・孔径・厚」がcmで「重」がgである。

No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7
径0.55　孔径0.15 厚0.35　重0.15	径0.50　孔径0.15 厚0.35　重0.18	径0.55　孔径0.18 厚0.32　重0.20	径0.55　孔径0.18 厚0.28　重0.13	径0.55　孔径0.18 厚0.22　重0.12	径0.55　孔径0.15 厚0.30　重0.16	径0.50　孔径0.18 厚0.18　重0.08
No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	NO. 14
径0.55　孔径0.20 厚0.38　重0.16	径0.53　孔径0.20 厚0.18　重0.10	径0.55　孔径0.18 厚0.20　重0.09	径0.40　孔径0.18 厚0.35　重0.10	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.15	径0.51　孔径0.15 厚0.35　重0.12	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.13
No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	No. 21
径0.55　孔径0.20 厚0.15　重0.08	径0.55　孔径0.15 厚0.15　重0.07	径0.50　孔径0.20 厚0.18　重0.11	径0.50　孔径0.20 厚0.20　重0.08	径0.50　孔径0.15 厚0.22　重0.10	径0.50　孔径0.15 厚0.38　重0.19	径0.50　孔径0.18 厚0.23　重0.10
No. 22	No. 23	No. 24	No. 25	No. 26	No. 27	No. 28
径0.55　孔径0.20 厚0.45　重0.18	径0.50　孔径0.20 厚0.32　重0.16	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.15	径0.55　孔径0.20 厚0.25　重0.12	径0.55　孔径0.18 厚0.32　重0.17	径0.55　孔径0.20 厚0.35　重0.16	径0.55　孔径0.20 厚0.45　重0.20
No. 29	No. 30	No. 31	No. 32	No. 33	No. 34	No. 35
径0.55　孔径0.20 厚0.38　重0.18	径0.55　孔径0.20 厚0.38　重0.12	径0.55　孔径0.20 厚0.40　重0.14	径0.60　孔径0.20 厚0.25　重0.13	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.14	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.25　重0.10
No. 36	No. 37	No. 38	No. 39	No. 40	No. 41	No. 42
径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.11	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.14	径0.50　孔径0.18 厚0.20　重0.10	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.40　重0.16	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.16	径0.50　孔径0.20 厚0.20　重0.08

0　5cm

(1/1)

第 35 図．写真 58，表－7　滑石製模造品（臼玉）（2）

No. 43	No. 44	No. 45	No. 46	No. 47	No. 48	No. 49
径0.50　孔径0.15 厚0.18　重0.08	径0.50　孔径0.20 厚0.32　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.15	径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.25　重0.11	径0.50　孔径0.18 厚0.20　重0.09	径0.50　孔径0.18 厚0.25　重0.08
No. 50	No. 51	No. 52	No. 53	No. 54	No. 55	No. 56
径0.53　孔径0.20 厚0.20　重0.10	径0.55　孔径0.20 厚0.20　重0.08	径0.60　孔径0.18 厚0.18　重0.11	径0.52　孔径0.18 厚0.20　重0.09	径0.50　孔径0.20 厚0.15　重0.06	径0.55　孔径0.18 厚0.22　重0.10	径0.50　孔径0.15 厚0.22　重0.08
No. 57	No. 58	No. 59	No. 60	No. 61	No. 62	No. 63
径0.50　孔径0.18 厚0.28　重0.09	径0.40　孔径0.18 厚0.40　重0.08	径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.12	径0.50　孔径0.15 厚0.15　重0.07	径0.55　孔径0.18 厚0.35　重0.13	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.08	径0.50　孔径0.15 厚0.20　重0.09
No. 64	No. 65	No. 66	No. 67	No. 68	No. 69	No. 70
径0.55　孔径0.15 厚0.18　重0.07	径0.50　孔径0.20 厚0.25　重0.08	径0.55　孔径0.15 厚0.25　重0.10	径0.55　孔径0.15 厚0.20　重0.08	径0.55　孔径0.15 厚0.18　重0.06	径0.55　孔径0.18 厚0.20　重0.06	径0.55　孔径0.20 厚0.13　重0.05
No. 71	No. 72	No. 73	No. 74	No. 75	No. 76	No. 77
径0.55　孔径0.18 厚0.10　重0.04	径0.50　孔径0.20 厚0.15　重0.05	径0.55　孔径0.15 厚0.40　重0.19	径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.18	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.17	径0.55　孔径0.18 厚0.20　重0.10	径0.55　孔径0.18 厚0.32　重0.15
No. 78	No. 79	No. 80	No. 81	No. 82	No. 83	No. 84
径0.50　孔径0.20 厚0.55　重0.25	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.20	径0.55　孔径0.20 厚0.50　重0.24	径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.13	径0.55　孔径0.20 厚0.20　重0.11	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.14	径0.55　孔径0.18 厚0.40　重0.20

0　5cm

(1/1)

第 36 図．写真 59．表－ 8　滑石製模造品（臼玉）（3）

No. 85	No. 86	No. 87	No. 88	No. 89	No. 90	No. 91
径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.15	径0.60　孔径0.18 厚0.30　重0.15	径0.55　孔径0.18 厚0.38　重0.21	径0.55　孔径0.18 厚0.40　重0.21	径0.50　孔径0.20 厚0.43　重0.20	径0.60　孔径0.18 厚0.25　重0.13
No. 92	No. 93	No. 94	No. 95	No. 96	No. 97	No. 98
径0.50　孔径0.18 厚0.20　重0.12	径0.55　孔径0.20 厚0.40　重0.22	径0.55　孔径0.15 厚0.35　重0.14	径0.55　孔径0.20 厚0.35　重0.18	径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.15	径0.50　孔径0.20 厚0.33　重0.13	径0.55　孔径0.20 厚0.38　重0.17
No. 99	No. 100	No. 101	No. 102	No. 103	No. 104	No. 105
径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.16	径0.50　孔径0.20 厚0.32　重0.15	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.18	径0.50　孔径0.20 厚0.15　重0.09	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.16	径0.50　孔径0.20 厚0.43　重0.19	径0.55　孔径0.20 厚0.35　重0.18
No. 106	No. 107	No. 108	No. 109	No. 110	No. 111	No. 112
径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.17	径0.55　孔径0.18 厚0.35　重0.14	径0.55　孔径0.13 厚0.18　重0.10	径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.12	径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.40　重0.19	径0.55　孔径0.20 厚0.40　重0.17
No. 113	No. 114	No. 115	No. 116	No. 117	No. 118	No. 119
径0.35　孔径0.12 厚0.30　重0.07	径0.50　孔径0.15 厚0.20　重0.11	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.13	径0.53　孔径0.18 厚0.30　重0.14	径0.50　孔径0.20 厚0.33　重0.15	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.16	径0.55　孔径0.18 厚0.40　重0.18
No. 120	No. 121	No. 122	No. 123	No. 124	No. 125	No. 126
径0.50　孔径0.20 厚0.28　重0.12	径0.55　孔径0.25 厚0.35　重0.15	径0.50　孔径0.20 厚0.40　重0.21	径0.50　孔径0.15 厚0.40　重0.17	径0.55　孔径0.20 厚0.25　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.17	径0.50　孔径0.20 厚0.40　重0.18

0　5cm

(1/1)

第 37 図．写真 60．表－９　滑石製模造品（臼玉）（４）

No. 127	No. 128	No. 129	No. 130	No. 131	No. 132	No. 133
径0.55　孔径0.15 厚0.40　重0.20	径0.55　孔径0.20 厚0.40　重0.20	径0.58　孔径0.18 厚0.28　重0.14	径0.55　孔径0.15 厚0.38　重0.17	径0.55　孔径0.15 厚0.30　重0.16	径0.53　孔径0.20 厚0.30　重0.14	径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.14
No. 134	No. 135	No. 136	No. 137	No. 138	No. 139	No. 140
径0.50　孔径0.15 厚0.23　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.33　重0.15	径0.50　孔径0.15 厚0.43　重0.14	径0.60　孔径0.15 厚0.40　重0.15	径0.60　孔径0.20 厚0.40　重0.21	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.14	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.13
No. 141	No. 142	No. 143	No. 144	No. 145	No. 146	No. 147
径0.50　孔径0.20 厚0.28　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.20　重0.11	径0.53　孔径0.20 厚0.25　重0.13	径0.50　孔径0.15 厚0.35　重0.15	径0.55　孔径0.15 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.15 厚0.28　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.25　重0.11
No. 148	No. 149	No. 150	No. 151	No. 152	No. 153	No. 154
径0.55　孔径0.18 厚0.25　重0.11	径0.55　孔径0.18 厚0.35　重0.15	径0.50　孔径0.15 厚0.25　重0.12	径0.55　孔径0.18 厚0.15　重0.10	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.15 厚0.40　重0.20	径0.55　孔径0.18 厚0.20　重0.12
No. 155	No. 156	No. 157	No. 158	No. 159	No. 160	No. 161
径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.16	径0.55　孔径0.20 厚0.50　重0.20	径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.16	径0.50　孔径0.20 厚0.28　重0.11	径0.50　孔径0.15 厚0.40　重0.16	径0.40　孔径0.13 厚0.33　重0.04
No. 162	No. 163	No. 164	No. 165	No. 166	No. 167	No. 168
径0.55　孔径0.15 厚0.28　重0.14	径0.50　孔径0.15 厚0.35　重0.11	径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.18	径0.55　孔径0.20 厚0.35　重0.10	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.15 厚0.20　重0.08	径0.55　孔径0.15 厚0.43　重0.15

0　5cm

(1/1)

第 38 図，写真 61，表 -10　滑石製模造品（臼玉）（5）

No. 169	No. 170	No. 171	No. 172	No. 173	No. 174	No. 175
径0.60　孔径0.18 厚0.20　重0.11	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.15	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.13	径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.14	径0.50　孔径0.15 厚0.38　重0.15	径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.40　重0.16
No. 176	No. 177	No. 178	No. 179	No. 180	No. 181	No. 182
径0.50　孔径0.18 厚0.15　重0.07	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.11	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.14	径0.50　孔径0.20 厚0.38　重0.15	径0.55　孔径0.15 厚0.28　重0.12	径0.60　孔径0.20 厚0.25　重0.15	径0.50　孔径0.18 厚0.25　重0.09
No. 183	No. 184	No. 185	No. 186	No. 187	No. 188	No. 189
径0.60　孔径0.18 厚0.30　重0.13	径0.55　孔径0.15 厚0.20　重0.09	径0.50　孔径0.18 厚0.35　重0.16	径0.50　孔径0.18 厚0.23　重0.14	径0.55　孔径0.20 厚0.30　重0.12	径0.55　孔径0.18 厚0.15　重0.07	径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.15
No. 190	No. 191	No. 192	No. 193	No. 194	No. 195	No. 196
径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.15	径0.30　孔径0.18 厚0.25　重0.12	径0.50　孔径0.20 厚0.25　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.23　重0.10	径0.50　孔径0.18 厚0.35　重0.16	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.16	径0.50　孔径0.15 厚0.13　重0.08
No. 197	No. 198	No. 199	No. 200	No. 201	No. 202	No. 203
径0.55　孔径0.15 厚0.25　重0.12	径0.55　孔径0.15 厚0.18　重0.09	径0.55　孔径0.15 厚0.23　重0.11	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.13	径0.55　孔径0.18 厚0.30　重0.15	径0.55　孔径0.18 厚0.13　重0.06	径0.50　孔径0.20 厚0.18　重0.10
No. 204	No. 205	No. 206	No. 207	No. 208	No. 209	No. 210
径0.50　孔径0.18 厚0.38　重0.14	径0.55　孔径0.20 厚0.25　重0.11	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.10	径0.40　孔径0.15 厚0.30　重0.07	径0.40　孔径0.15 厚0.30　重0.05	径0.50　孔径0.18 厚0.10　重0.04	径0.40　孔径0.18 厚0.30　重0.05

0　5cm

(1/1)

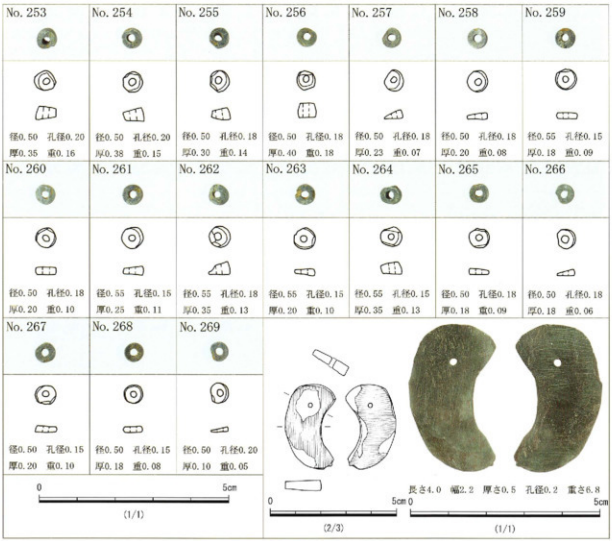
第 39 図，写真 62，表 -11　滑石製模造品（臼玉）（6）

No. 211	No. 212	No. 213	No. 214	No. 215	No. 216	No. 217
径0.50　孔径0.20 厚0.35　重0.14	径0.50　孔径0.15 厚0.30　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.25　重0.15	径0.50　孔径0.18 厚0.28　重0.11	径0.40　孔径0.15 厚0.30　重0.08	径0.55　孔径0.20 厚0.23　重0.11	径0.40　孔径0.15 厚0.35　重0.09
No. 218	No. 219	No. 220	No. 221	No. 222	No. 223	No. 224
径0.55　孔径0.15 厚0.22　重0.09	径0.50　孔径0.18 厚0.28　重0.10	径0.40　孔径0.18 厚0.30　重0.08	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.14	径0.55　孔径0.20 厚0.15　重0.09	径0.40　孔径0.15 厚0.30　重0.07	径0.50　孔径0.20 厚0.25　重0.12
No. 225	No. 226	No. 227	No. 228	No. 229	No. 230	No. 231
径0.38　孔径0.15 厚0.30　重0.09	径0.55　孔径0.18 厚0.23　重0.11	径0.50　孔径0.18 厚0.23　重0.11	径0.55　孔径0.22 厚0.15　重0.07	径0.55　孔径0.18 厚0.20　重0.12	径0.50　孔径0.18 厚0.20　重0.08	径0.40　孔径0.18 厚0.33　重0.09
No. 232	No. 233	No. 234	No. 235	No. 236	No. 237	No. 238
径0.50　孔径0.20 厚0.15　重0.06	径0.50　孔径0.18 厚0.15　重0.08	径0.50　孔径0.15 厚0.13　重0.08	径0.50　孔径0.15 厚0.18　重0.11	径0.55　孔径0.18 厚0.25　重0.11	径0.38　孔径0.15 厚0.18　重0.05	径0.50　孔径0.20 厚0.18　重0.09
No. 239	No. 240	No. 241	No. 242	No. 243	No. 244	No. 245
径0.50　孔径0.20 厚0.15　重0.07	径0.50　孔径0.15 厚0.28　重0.11	径0.50　孔径0.18 厚0.15　重0.09	径0.53　孔径0.15 厚0.08　重0.05	径0.50　孔径0.18 厚0.35　重0.16	径0.50　孔径0.20 厚0.25　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.12
No. 246	No. 247	No. 248	No. 249	No. 250	No. 251	No. 252
径0.50　孔径0.18 厚0.30　重0.13	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.14	径0.50　孔径0.15 厚0.28　重0.11	径0.50　孔径0.15 厚0.28　重0.11	径0.50　孔径0.15 厚0.38　重0.12	径0.50　孔径0.20 厚0.20　重0.10	径0.50　孔径0.20 厚0.30　重0.17

0　5cm

(1/1)

第 40 図，写真 63，表 -12　滑石製模造品（臼玉・勾玉）（7）・土師器坏



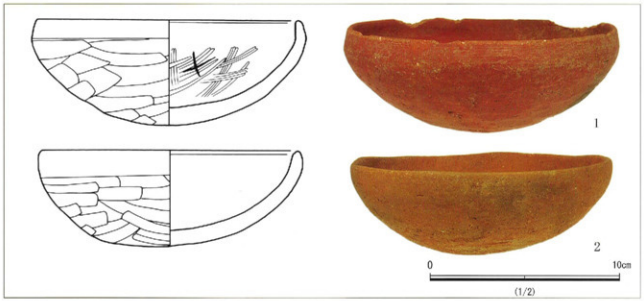


表 -12　石棺内出土土師器 観察表

遺構	No.	種別	器種	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
石棺	1	土師器	坏	13.7	5.5	—	底部は丸底で体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	内面は放射状に赤彩を施す。，口縁部は内外ともにヨコナデ，外面は荒れ。，内外面ともに赤彩が落ちる。	内 10YR5/6 外 10YR5/6	石英 少　長石 多　雲母 多	良好	内面に「ハの字」状の痕跡有り
石棺	2	土師器	坏	13.4	5.0	—	底部は丸底で体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	内面は放射状，一部横の板状痕跡が残る。，口縁部は内外ともにヨコナデ，外面は強く磨かれる。	内 7.5YR5/4 外 7.5YR5/4	石英 少　長石 多　雲母 多	良好	

以上が石棺内部から出土した遺物の全てである。まず，図示した臼玉であるが，これらは覆土中と底面に敷き詰められた石材の下から出土しているもので，No.1～19が底面石材下で，No.20～27が覆土の中～低層で，No.73～269が簡いにかけた覆土中より出土したものである。臼玉の平面形状は，概ね直径約0.50cmを測る円形を呈し，孔径についても約0.18cmとほぼ均一である。厚みに関しては約0.38cm～0.08cmの幅で個体差が認められる。一般的に，古い時期の臼玉は，ある程度の厚みを持ち，胴部が若干膨らむ「樽形」を呈するものが多いとされ，新しい時期の臼玉では，薄くシャープな造りが特徴とされている。今回図示した269点の臼玉では，個体別に観察すると，上記，両方の特徴が見受けられる為，この資料で製作年代の新旧を特定する事は難しい。続いて，同じく石棺内部より出土した滑石製模造品の「勾玉」だが，出土位置は後述する出土遺物の土師器坏下側からである。こちらはやや大振りで，造りも若干粗雑である。形状は板状であり，古い時期に多く見られる，丸みを帯びた丁寧な造り込みの勾玉では無い事から，製作年代は新しい時期に帰属する可能性が考えられる。最後に滑石製模造品全体について触れておくが，関東地方における滑石石材は，北武蔵の三波川変成帯と福島県から茨城県にかけて広がる日立変成帯から採取する事が出来る。しかし，多くのものは三波川変成帯のものであると考えられている。滑石製模造品は，中期の特徴的な遺物であり，早い時期では前期でも確認されてはいるが，中期に最も普及し，後期に近づくにつれ序々にその数を減らし，後期には姿を消して行く遺物である。続いて，同じく石棺内部から出土した土師器坏を観察する。まずはNo.1の土師器坏であるが，底部は丸底を呈し，体部は内湾しながら口縁に至り，口縁部はやや内径する。そして，内面には放射線状に広がる篦ミガキが見られ，内外面ともに赤彩が施されている。また，内面には「十」若しくは「×」と見える線刻も有す。次にNo.2の土師器坏は，底部は丸底で体部は内湾しながら口縁に至り，口縁部は直立する。外面は粗く篦ケズリが施され，内面は篦ナデされるが，整形時に刻まれたと思われる線状の擦痕が多数認められる。

これら2点の土師器坏の帰属年代は，器形特徴を踏まえ年代観を与えると，5世紀末～6世紀前半段階に比定しうるものではなかろうか。上記，全ての遺物についての検証結果が正しいものとして考えた場合，この小型箱式石棺の構築時期は中期末～後期前葉と言う事になる。そうなれば，藤塚古墳が築造されたと考えられている，推定5世紀前葉段階からは，最大で約1世紀ほどの時間差の後，本石棺が構築された事になる。

「川崎純徳『茨城の装飾古墳』1982」では「追葬を想定する場合には・・・・半世紀近い時間のズレを考慮しないわけにはいかないであろう」との一文が記されているが，今回の結果は，ほぼその倍にあたる時間差である。

今回の発掘調査では，帰属年代を特定しうる須恵器等の供伴遺物も無く，調査範囲も周溝の一部のみであった事から，遺構の全貌についても未解明な部分が多い。従って，現段階ではこれ以上の検証を試みる事は難しい。今後における調査・研究成果の充実を待ち再検討してみたい。

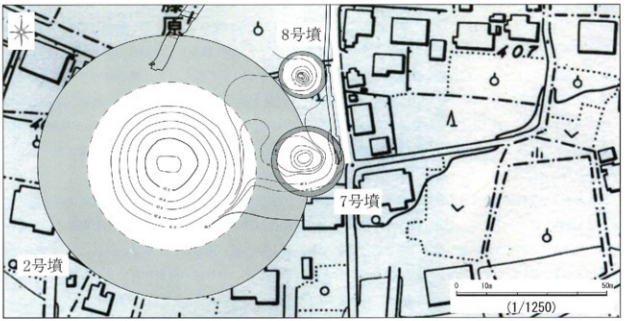
第3項　7号墳・8号墳

写真64　7号墳全景

写真65　8号墳全景

今回の本調査範囲では，7・8号墳の周溝の一部のと考えられる遺構が検出されている。まずは7号墳から説明するが，この古墳は，御前塚古墳と藤塚古墳の陪冢であると考えられているもので，本古墳の現況は，旧態は円墳であったと思われるが，後世の削平によって墳丘の形状が大きく変わってしまっているとものと思われる。特に墳丘西側での損傷が激しく，現在確認し得る平面形状は不整な楕円形である。今回の発掘調査では，墳丘部分は調査範囲から外れていた為，構造解明に繋がる調査を施す事は出来なかった。検出した周溝と思われる溝の幅は約2.0mを測り，この溝の外郭から，現状で墳丘の中心部であったと考えられる位置までの距離を基準として円を描けば，この円墳全体の最大径は24mである。また，この円墳の位置は，前項で検証した藤塚古墳の推定周溝範囲内である。この推定範囲が正しいものであるならば，本古墳の築造年代は藤塚古墳よりも新しいものと言えよう。本古墳からは遺物の出土は無く，石槨等の埋葬施設も認められない為，現段階ではこれ以上の検証は行えない。以後の調査等による成果の蓄積を待ち，改めて検討してみたい。

第41図　7・8号墳　現況平面図及び周溝推定線



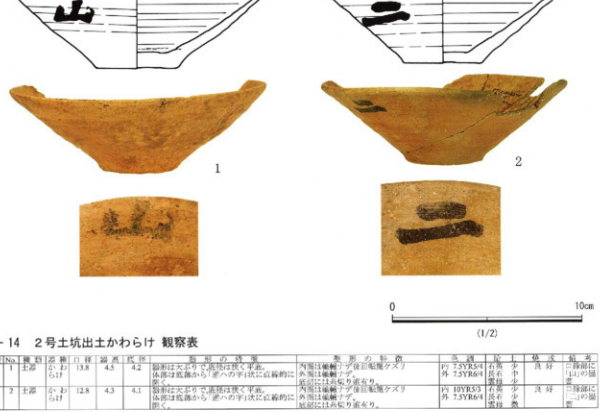
続いて8号墳であるが，こちらも7号墳と同じく，隣接する御前塚古墳と藤塚古墳の陪冢であると考えられているものである。この古墳も旧態は円墳であったと思われるが，現況は墳丘の削平が著しく，僅かな高まりを確認する事しか出来ない。今回の調査によって検出された遺構は，この古墳の周溝と考えられるものであるが，調査区の制約上，確認し得たのは，その外郭と考えられる一部のみである。この外郭から，墳丘の中心部であったと考えられる位置までの距離を基準として円を描いた場合，本古墳全体の最大径は16mを測る。この円墳は，先述の7号墳とは違い，藤塚古墳の周溝推定線とは近接しているものの，その範囲の外側に位置している。出土遺物や埋葬施設の痕跡は認められない。左記の通り，この古墳に伴う資料が殆どない為，築造年代等の検証は現段階では不可能である。現在，この円墳の墳丘には「石塔」の部材が散乱しているが，これらはこの古墳に伴うものではなく，近世以降の所産と考えられる新しいものである。

以上が今回の発掘調査成果に基づいて行った，御前塚古墳，藤塚古墳，7号墳，8号墳の検証結果である。本文中でも示唆した通り，現段階では「御前塚古墳群」に関する調査成果や参考資料は少ない。しかし，今回の発掘調査によって得られた成果は，これら古墳の未解明であった部分の一端を埋める役割を果たせたのではなかろうか。今後に於ける調査・研究の進展によって，更なる「御前塚古墳群」の全貌が解明されてゆく事に期待したい。

第4項　中世の土坑（２号土坑）

本遺構は，前項で検証した７号墳の周溝内より検出された土坑である。しかし，その遺構の殆どは調査区外へと延びており，平面形状については不明である。この僅かに確認し得た遺構壁上からは，２個体の墨書が施された「かわらけ」が出土している。下図はその「かわらけ」の実測図と写真図版である。

第42図　２号土坑出土遺物（かわらけ），写真66



表－14　２号土坑出土かわらけ 観察表

器種	No.	種類	器種	口径	器高	底径	記載の諸事	整形の特徴	色調	化土	焼成	備考
２土	1	土器	かわらけ	13.8	4.5	4.2	器形は大きやで底部は狭く平底。体部は底部から「逆ハの字」状に直線的に開く。	内面は轆轤ナデ後回転横ケズリ 外面は轆轤ナデ 底部には糸切り痕あり。	内 7.5YR5/4 外 7.5YR6/4	石英 少 長石 中 黒雲 少	良好	二箇所に「仁」の墨書
２土	2	土器	かわらけ	12.8	4.3	4.1	器形は大きやで底部は狭く平底。体部は底部から「逆ハの字」状に直線的に開く。	内面は轆轤ナデ後回転横ケズリ 外面は轆轤ナデ 底部には糸切り痕あり。	内 10YR5/3 外 7.5YR6/4	石英 少 長石 少 黒雲 微	良好	二箇所に「二」の墨書

上図の通り，この「かわらけ」２点の器形は比較的大ぶりで，双方とも底径は狭く，体部は底部から「逆ハの字」状に開き口縁に至る。体部は轆轤整形で，底面には糸切り痕が認められる。そして，No.１の遺物には「山」と読める墨書が，No.２の遺物には漢数字の「二」と読める墨書が施されている。これら２点の「かわらけ」の器形特徴は，「宇留野主税　2005「史跡真壁城本丸出土資料の再検討」『Archaeo-clio』第５号　東京学芸大学」で試みられている編年に併せれば，「Ⅱ－Ａ型式」に分類されているものとほぼ等しい。この編年を援用して年代観を与えるならば，本遺物は15世紀後半に帰属するものと考えられる。古墳域は中世でも聖地として認識されていたようで，古墳を再利用して中世墓が造られるケースも少なくない。また，中世の遺跡では，「かわらけ」２枚を「合わせロ」にして埋納した遺構も確認されており，これらは呪術的な所産であると考えられている。今回の資料がどのような状況であったかまでを言及するには至らないが，墨書土器と言う性格を鑑みると，何らかの呪術的行為を指摘する事も出来よう。本遺構が検出された位置が古墳に至近の距離である事を踏まえて考えた場合，現段階では明らかとはなっていないが，当該地にも中世墓が存在し，今回検出したこの土坑も，その「墓」に係わる何らかの呪術的な役割を果たしていたと想定しても無理は生じないと思われる。上記の古墳域に造られる中世墓については「斎藤　弘 1999「中世墓における古墳の再利用」『HOMINIDS』第２号」に詳しい。

以上が今回の発掘調査によって発見された、全ての遺構と遺物に関する検証の結果である。

検証とは言っても、事実記載が中心となり、十分な考察が成されていない事は否めない事実である。従って、不完全で解釈しづらい部分も多々見受けられると思うが、今回の発掘調査に基って得られた１次資料の提供には、努めて留意したつもりである。今回提示したこれらの成果が、以後の研究の一助となり、地域の歴史文化の解明に寄与することが出来れば幸いである。末筆になるが、本書を編集するにあたり、多数の諸機関、諸氏より多大な尽力と御教示を賜っている。ここに記して深く感謝の意を表したい。

－参考・引用文献一覧－

・岩間町町史編さん委員会 2002『岩間町史』岩間町・

・文化財を後世に引き継ぐ実行委員会 2005『いわまの伝え話』岩間町教育委員会

・黒澤彰哉、海老澤稔、川口武彦、福島賢吾 2004「東平遺跡発掘調査報告書－推定安根駅家跡－」岩間町教育委員会

・明治大学 2001『三昧塚古墳第３次発掘調査報告書』玉造町遺跡調査会・玉造町教育委員会

・阿野廣男、阿野通高 1990「中平遺跡」中平遺跡発掘調査会

・才　博幸 2006「須恵器古墳・藤塚古墳の造営」『要長岐考古第 28 号』要長岐考古同人会

・才　博幸 2007「須恵器古墳出土の墨書」『要長岐考古第 29 号』要長岐考古同人会

・小澤重雄 2007「小型の照射施設について」『「 蔓 氷 渡 」 －阿合正一・斎藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集－』
川井・斎藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会

・石橋　充 1995「常総地域における片岩使用の照射施設について」『筑波大学先史学考古学研究』第６号別冊、筑波大学歴史・人類学系

・斎藤　弘 1999「中世遺における古墳の再利用」『HOMINIDS』第２号、CRA

・加藤貴之 2004「長岡遺跡群の再検討－古代官衙と集落のはざま－」『研究紀要４』（財）印旛郡市文化財センター

・宇留野主税 2005「史跡真壁城本丸出土資料の再検討」『Archaeo-clio』第５号東京学芸大学

・川崎純徳 1982『茨城の装飾古墳』斯風土記社・群　国男 1975『古墳の設計』（株）要建書館

・新野直吉 1981「国造と氏土（改訂増補版）」『日本歴史新書』至文堂

・石川　均 1985「兎の台遺跡調査報告Ⅰ」『芳賀町の文化財第 10 集』栃木県教育委員会

凡　例

1　第２図は、笠岡市役所発行１／25,000「笠岡市全図」を使用した。

2　第３図は、（旧）岩間町発行 1/2,500「岩間町都市計画図」を使用した。

3　実測図・遺物観察表等で使用した記号・網掛けは次のとおりである。

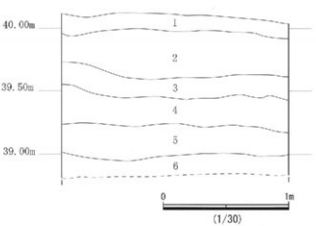
遺構　住居跡－住　土坑－土　溝跡－溝　柱穴・ピット－P　掘乱－K　炉－[網掛け]　遺物　赤彩－[網掛け]

4　実測図の縮尺は各図面に記した。

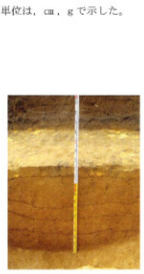
5　土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。

6　遺物観察表中の法量は、＜　＞内の数値は現存値を、（　）内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、cm，g で示した。

層　序



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色ローム
　 直径土ブロックを少量含む。
2. 10YR4/4 褐色ローム
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色ローム
4. 10YR5/6 黄褐色ローム
5. 10YR5/6 黄褐色ローム
6. 10YR6/6 明黄褐色ローム



抄　録

ふりがな	ごぜんづかこふんぐん　きたうらひがしいせき
書名	御前塚古墳群　北浦東遺跡
副書名	市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	笠間市教育委員会・齋藤 洋
編集発行機関／所在地	笠間市役所岩間支所道路整備課 ／ 〒319-0294 茨城県笠間市下郷5140 笠間市教育委員会 ／ 〒309-1698 茨城県笠間市石井717 株式会社 地域文化財コンサルタント ／ 〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12
発行日	2008（平成20）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごぜんづかこふんぐん 御前塚古墳群 きたうらひがしいせき 北浦東遺跡	いばらきけん かさまし いずみ 茨城県 笠間市 泉 あざきたうら 字北浦 1956-1ほか	08216	105	36° 17′ 21″	140° 16′ 19″	20071217 ～ 20080104	約540	市道改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ごぜんづかこふんぐん 御前塚古墳群 きたうらひがしいせき 北浦東遺跡	集落跡	古墳	周溝　4条 小型箱式石棺　1基	埴輪・土師器（坏）， 石製品（勾玉・臼玉）	
		弥生	竪穴住居跡　2軒	弥生土器	
		中世	土坑　1基	土器（かわらけ）	
		時期不明	土坑　1基	弥生土器	

要約

今回の発掘調査によって検出された遺構は，弥生時代後期のものと考えられる竪穴住居跡が2軒，各古墳の周溝の一部（御前塚古墳・藤塚古墳・7号墳・8号墳），並びに，藤塚古墳の周溝底面から検出した小型箱式石棺（墓）が1基，7号墳周溝内より検出された中世の所産であると考えられる土坑が1基，時期，用途不明の土坑が1基である。今回の本調査範囲は市道改良工事を施行する幅の手状に延びる限られた狭い範囲であった為，各遺構の全容を把握するには至っていない。しかし，本調査範囲外ではあったが，公民館のご厚意により，ゲートボール場として機能しているグランド横にもトレンチを設定し調査を実施する事が叶った。この結果，御前塚古墳の周溝の幅員と遺構確認面からの深度が明らかとなっている。今回出土した主な遺物は，7号墳周溝埋より検出した弥生時代後期の帰属と考えられる住居跡からは弥生土器片が3点と，藤塚古墳の周溝底面に構築された小型箱式石棺内からは完形の土師器坏2点，滑石製の勾玉1点，及び臼玉269点である。また7号墳周溝内より検出の中世の帰属と考えられる2号土坑内からは墨書が施された「かわらけ」が2個体出土している。

出土遺物及び図面等の取扱いについて

項目	内容
水洗い	・出土遺物全てについて行った。
注記	・手書きにて行った。（例）071218 ゴゼンツカ SK02-1 のように注記した。
復元	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書記載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳，図面台帳，写真台帳があり，検索が可能なように作成している。
出土遺物収納状況	・出土遺物については，報告書使用と未使用に分け，遺物収納箱に収めた。各箱には収納内容を明記している。なお，木使用分については種別毎に分類，収納してある。

御前塚古墳群
北浦東遺跡
－市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成20（2008）年３月31日　発行

発行　笠間市役所岩間支所道路整備課
〒319-0294　茨城県笠間市下郷5140
笠間市教育委員会
〒309-1698　茨城県笠間市石井717
株式会社 地域文化財コンサルタント
〒286-0201　千葉県富里市日吉台1-23-12

印刷　社会福祉法人　東京コロニー　コロニー印刷
〒165-0023　東京都中野区江原町2-6-7